明治三十二年八月二十三日發兌

女鑑

第百八拾七號

東京國光社

女鑑第百八拾七號

目錄

安養尼



遠慮

遠き慮なきものは、近き憂あり。もはや、かしこき人々は、とくに用意し玉ふ事にて、來る菊月は、いよ〱、雜居をさしゆるすと云ふ月なり。あはれ、如何なる開化を來すらん。あはれ、如何なる煩雜を來すらん。きかまくもあり、きかまくもなき月にやあらんかと、我等の痛慮する所なり。むかし、我族、一の商賣をなさんとせしに、一人來りて、聞ゆるやう、古より、士族の商法とて、大方は仆るゝものなり。さるは、已清きものは、人も清しと察す。士族や、士の心を以て、人を推す、店に來るものは皆直く、皆信ありと思ふ。故に、或は、たばかられ、いつはられて、損を來すもの多きなり。されば、店に來るものは、皆盜人と思へよと、あはれ、あまりにも、むざんなる事を云ふ人かなとて、我族、心にも留めざりしが、果して、

人に信をおき、物を貸し、價を貸す。いたづらに、盜人に、貧錢となりゆきて、みぢんもあきなひとならず。遂に、あきれてやみにたり。同じ國人の中にもかゝり、まして知らぬ、他國のものゝ心は如何ならん、此のほど、內地雜居前の出來事とて、一の新聞に載せしを見しに、英人にや、伊人にや忘れたり。何れ、異國人の食ひにげ、借りにげにて、さん〴〵人を勞せしめ、物を費さしめ、その費を拂はず、その勞をつくなはずして、去りしと云ふなり。そも、古より、他國に行きて、かせがんと云ふは、無宿無頼の徒多しと聞く、されど、これ等は小事なり。如何に日本の人、善良にて、そのよき心を以て推すも、かゝる事、數度に渡らば、又、用意する所や至らん。毒虫、毒虫と見すれば除きやすし、毒草、毒草と見すれば、刈りやすし、されども、毒草、その毒をかくし、中々にある病者を愈し、毒虫、毒をかくして、反つて、人を救はゞ、人、如何でか、之を驅る事をせん。之を去る事をなさん。去らず。刈らず。全く、之をよしとして、根をはびこらし、毒を太からしめんには、如何に。

かのねぶれぬ人に盛るに、アヘン、少許を以てす、心よくねぶる。その人よろこびてこれをふくす。遂に、その毒、腹中に溜りて、早く、玉の緒を絶つに至る。其の他ぜんそくやみ、又、いたみある諸病人等、モルヒ子、少許を用ゐれば、一時、そのいたみを去り、くるしみを除く、人よろこびて、之を用ゆ、病は漸々につのり、藥は、少許にては、きかずなり。後には、追々、多量を用するに至る。其の毒、遂に、つもりて命を終るに至る。あはれ恐るべし。毒藥、反つて、藥りとなると云ふとも、只、一時なり。之れも、又、小事、たゞ、ねぶられぬ人、病ある人のふくするのみならんには。しかれども、少は多くなりやすく、細は太となり安きものなり。もし此の病者の世に多くならば、如何せん、されは、まづ、病者を多からせぬ事をはからざるべからす。そも〳〵、此の程、ある人の語る事を聞くに、西洋の人々は、金持ちなり。もし、日本に來り。先きに、大金をなげうち、以て人を招ぎ、萬事を盛大にし、以て、之を安價に賣らん、人は、價の、少し高き方をよろこび、きそひて、之に使役せられ。又、一方は、安く買ふをよろこび、爭ひて、之を買ふ、さすれば、も

うけは少しども、多を以て制す、あはれ、日本は、遂に外國人、所有の如くなり。利は外國に歸し、日本人は、皆かれの雇夫とのみならんと、これは、たゞ、小見の人の云ひし言葉にて、さやうの事のみにも、あらざらんか、小人は、私欲つよくして、公益を思はず、たゞ、一寸先を思ひて、一尺をはからず。あしたを思ひて、夕べを知ず。たゞ、目前の小利を利として、永久の大利をはからず。己れが藏に收むる事のみを知りて、國の藏のむなしくなるを思はず。かゝる人の世に多からば、遂には、國まづしく、民、衣食を失ふに至るべし。これ、即ち、近き憂ひを招くものにて、かやうの者、即ち、ぜんそく病者とす。小人は、即ちぜんそく病者なり、かゝるもの一人にてとゞまらばよし、子につたはり、孫につたはり、從弟、再從弟か、此の病根あまねからしめ、遂に世界にぜんそく病者のみとなりて、毒藥のために、金銀財寶をとられはて、病者ならぬものまで、迷惑をかゝふるに至り。己れも、遂に毒藥をくすりとして、命を失ふに至るべし。異人あへて、人を食はずども、礦山にていつはられたるためしも、遠世にはあらざりき。あゝ思はざるべからず。思ひめぐ

らさずはあるべからず、ぜんそく病者よ、小人よ、女子よ、我等は、毒草を刈らんと欲するより、世の人の病者たらざる事をいのりてなん。

論説

日本女子今後の覺悟（三）

三輪田眞佐子

固より、かゝる習慣は、一朝にして改むべきにあらざれど、人の幼きころより、漸次、公共心を養はざるべからず。然るに、母たるものの、これを等閑に附するもの多きがごとし、見よ、小兒が、公園などの花を折るとき、徒に、他人の外觀を憚りて、制せんも、内心は、さまで、惡事と思はざるが如く、亦、彼が、他家の白壁などに、落書せんも、そが母たるものの叱咤せざるがごとし。故に、かゝる家庭にて、育成せしものなどが、利己的の人物とならで止まん、おのれ、諸所に於て、通るべからずと禁止ある塘堤などに、行人、その禁を犯しけん徑をなすを見ることしば〳〵なりき。そは事体、小なるめるも、深

く考れど、感慨、大ならざるあたはざるべし。

おのれ、外つ國の事情に迂きものながら、多少の書を讀み、亦、歐米の情態を實視せし人より聞くに、歐米人には、黄金を以て、無双の妙力を有するものとし信ずめり。故に彼等は、修德を言はずして、先づ、收益の道を考へ、萬一の秋に際しては、黄金の光を以て、衆目を眩惑せしめんことを謀るとかや。近來、この風習、わが國に輸入せられて、貴賤老若の區別なく、世の中は、財産なくては、如何ともすること能はずとの呼聲、頗る高きに至りぬ。從ひて、結婚せんにも、配偶者の品格よりも、その家に有する財産の多寡を問ふに及びけり。あはれ、國民の慶事か、そも〳〵凶事か。

勿論國土を開拓し、文明の貨物を製作し、亦、人工の巧妙を極むるは、更なり。各、自、現時のため、將、將來のため、衣食住の富祐と安固を企つるも、財産は必要なり。誰か、これを非とせん。されど、人生の目的を達せんための手段なる財産を以て、究極の主義となし。苟も、貨財を得るには、非理無道の方法に由るも可なりとして、さながら、虎豹の食を求めんが如く、狐狸の食を得んがごとく、或は、威壓もて、これを攫み、或は、猾智もて、これを盗まんも、世、これを怪まず、遂に、賄賂もて、政事を行ひ、金圓もて、智識を買ふに至る。今更言ふ勿れ。愛國の士、跡を絶ち、師弟の道振はざるを。唯、

同胞の疾苦を顧みずして、珍味を食ひ、錦衣を纏ふものを見れば、その性行を問はずして、直に紳士なり、貴孃なりと、世人の多數が呼ぶは事實なり。蓋し、彼等は、朝な、夕な、黄金を宗拜し、その功德を感謝する輩ならん。

これに反して、日夜勤勉し、終始、節儉し、正當なる餘財を、浪費せずして、蓄積し、これを以て、あるは、子孫を教育し、あるは、必要なる慈善を行ひ、若しくは、老後の安堵を謀るは、道德上賞すべき行なり。決して、非理無道の法方を以て、黄金を得、これを私利、私欲に費すものと混合すべきにあらず。わが國民は、一面より見れど、比較上蓄財心に乏しき欠點あるに拘らず、他面より見るときは、漸々、拜金の極端に馳せんとする傾向あり。

雜居と共に、一層、甚しきに進まんものは、拜金の觀念ならんか、されど、讀者は、超然と俗物の群を離れ、不義にして富み、且つ貴きは、われに於て浮雲のごとしといひし、孔子の言を取り、正當なる道を以て、衣食住を謀り、露ばかりも、世の濁流に、な染み玉ひそ。されと同時に飽食、暖衣のため、父祖傳來の家産を破るごときは、一身の耻辱のみならず。道德上よりも惡むべきことぞかし。されば、人は過ぎたるにもあらず。及ばざるにもあらざる中途を蹊むこそ望しけれ。おのれ、なは、旅の空なれど、白浪のよす

る汀に、宿を定めぬ。蜑の子が群がるを見るあり。或は、海濱の高樓に登りて、絲竹管絃に耽り、毫も、浮世の辛苦を知らざる如きものもあり。若しくは外人あり。商人あり。將、官吏などに、逢ふなど、折にふれ、事に感じてかくなん。

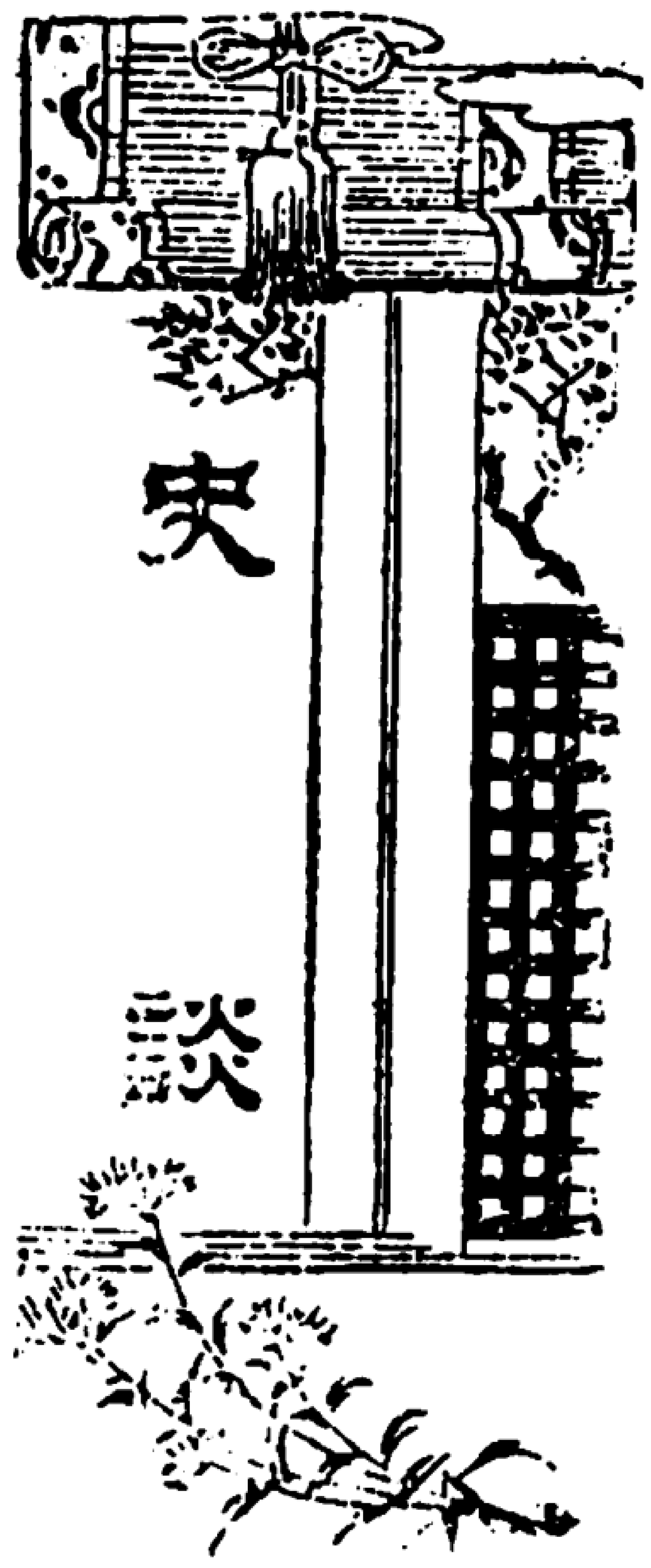
目前

吉野眞澄

紙片木片を、紫、くれなゐに採色して、之を花、風車につくりて、昇き來るあり。道傍の童兒われよ〳〵と呼び求め。求めて、一たび地に、落さで、たゝちに破壞すべきを。嗚呼小兒なるかな。小兒なるかな。或人かたりて曰く、才なく、藝なき男、父逝きて、にはかに、財を濫にし、行くに車馬をもてし。まとふに錦繡をもてし。飲食は日に甘美を極む。されば一鄕の夫女子、耳目かたむけ、爭そひて、妻たらんことを願ひたりき。一女あり。さし出で、たらちねの庭の敎にもしたがはずひたしき友の諫をも聽かず、遂にこれに歸きき。思ふにまかせて、榮華を極めしかば、かぎりある財なれば、忽ちつきはてたり。其の行末は、いはでも推しはからるべしとなむいへりける。嗚呼女なるか。女なるかな。彼の支那の呂尙の夫人を知れりや。呂尙とは、即ち、太公望をいふなり。呂尙、家居の時、釣にたくし、山溪に入りて、天下の形勢をはかる。此に年あり。老いて

白髪となり、産なく、財つきて、糊口亘暮にせまれり。夫人、大にうれへて曰く、妾、君が夫たりしより、爰に數十年、然るに、御身、一藝、一事なく。財、既につきて、かしぐものなし。日に竿を舁き行くとも、直なる釣に、餌だに用ゐざれば、いかで一魚だに獲べきと、呂尙魏然として、意に介せず。只、異日、大に獲るあらんことを云ふ。夫人信せず、外暴貞を移しぬ。天運遁還して、大魚、遂に、呂尙の釣にかゝりぬ。高車駟馬、旗旄道前し騎卒擁後す。夾道の人、相共に、駢肩累迹瞻望咨嗟す。さきの、離別を乞ひし夫人、奔走駭汗して、羞愧俯伏、以て、自、罪を車塵馬足の間に悔い、もとの如く夫たらん事を乞ふ。呂尙、車をとめて、徐に、水を取れと。いへり。夫人、大に喜びて一椀をさゝぐ。呂尙、直に地に投じ、再、此の器に復せよといふ。夫人茫然としてせん術をしらず。呂尙は、この間に馬をはしらせてされり。嗚呼愚なるかな。愚なるかな。此等の悔は、何等のしからしむる所ぞ。皆、是、目然の事にのみ心を動したりしによりてなるべし。所謂、目然のよくなり。然れども、何人と云へども、免れ易からず。只、思ふと、隨ふとにあり。彼の王陽明曰く、山中の賊は平げ安く。心中の賊はやぶり難しと。宜なるかな。此の言。心中の賊は、目然の慾によりて來る。思へば、則ち、賊去り、隨へば、則ち、禽獸童女の行となりて、人にわなづらる。諺に曰く、夫、田野に勞すれば、

婦たゞに熟ざせるに採。又、曰く、夫十年の經營、婦、一朝の言にやぶるともいへり。我が國の婦女、中古以來、其の位置の卑きに過ぎたるは、因緣、種々あるべけれども。此の遠慮なきは、其の大に居るならむ。故に女子、もし、相應の位置を保たむと欲せば、法律理論を云はんよりは、寧、思慮を深くせよ。思慮は先つ、目前の慾を制するより始むべし。



安養尼

塩井ふく子

むかし、西洋のポーランドに、ジョンゲーンと云ふ人ありけるが、人となり、堪忍づよく、說法などして、よく人を敎へ導くをよろこびゐたりしが、或夜、馬にのりて、暗き、林の中を行きけるに、盜賊共群れ居たり。

ジョンゲーンは、之を見て思ふやう、彼等の、かく惡業をするは、畢竟、物の足らぬ故なるべし。物だに足らば盜みする事もあるまじと思ひて、頸にかけたる金嚢に、銀貨の充てるをはじめ、金鎖より、ゆびにかざれる指環、また乘り來りたる馬までも、殘りなく與へたるに、盜賊の長とればしきもの聲高く、汝が所持の品はこれぞかりなりや、なほ、此の外に貨幣はなきかと問ふに、今は、また、一種も持てるものなしと答へて、其の所をすぎさりしが、途すがら上衣のえりに、なほ金貨、若干縫ひこみありし事を思ひ出で、再びもとの

所に立ちかへり、我は、汝等に、毫も詐りを言はん心はあらざりしかど、先には、たま〳〵、之を忘れたり。ゆるせよとて、懐中より、金貨をいだして與へけるに、さしもの盗賊も、之を見て、かつおどろき、かつ感じて、其の金貨をしりぞけとらざるのみか、先きのものさへかへして、一同に、己の所業をはぢ、過を謝して、遂に善心にたちかへりしとなり。

また、支那の後漢の代に、陳寔といふ人ありけるが、或夜、その家に盗人忍び入り、ひそかに、梁の上にかくれ居たるを、寔、知りて、家族を呼びあつめ、容色を正し、人たるものは、みづからつとめて惡をさり、善にうつらずばあるべからず。人の性は、もと、善とて、不善のものも、初めより惡なるにはあらず。たゞ、習ひによりて、不善に至れるなり。見よ、彼の梁上なる人こそ、卽ち、そのものなれと指し示せしに、盗人おどろきて、自ら、梁を下り來り、罪を謝しけるに、寔、あはれみて、之に絹二匹を與へ、後をいましめけるに、盗人、涙を流して、其の恩惠を謝し、再び、不善をせざりしとなり。善惡の心は、誰れもあるものにや。

安養尼と聞えたるは、横川慧心の妹なり。ある夜、郡中の惡漢ども、尼の室に入り來り、しら浪のいたくもたちさわぎ、あるかぎりのもの、悉くかすめ去りたり。尼は、つゆさわぎたるけしきもなく、たゞとるにまかせて去らせたりしが、たま〳〵盗人、一衣を路におとし行きたり。徒尼、之を拾ひ來りて、尼公に納けるに、尼公折りふし、ひるのものも、夜のものもとり去られて、殘るは紙被のみなり。されど、なほ從容、之をいれんともせず、拾ひ來りし尼に聞ゆるやう、そのものは、渠、已に、己が物となしたり。たとへ、今、途におとし行くとも、渠は渠のものとしたる上は、もはや、我物にはあらず。汝、速に、かのものゝあとを遂ふて、それを與へよとて、手にだもふれざるに、徒尼、乃ち、其の言葉に從ひて、盗人のあとを遂ひ、尼公が言葉をのべて、その物を渡しけるに、盗人ども、之を聞き、さ

やにいさぎよき人もありける世に、ぬすみせん事のはづかしさとて、大に、その罪を悔ゐ、とりてしものを、悉くもどして、己の過を謝したりとぞ。暴惡非道の盗賊も、恩徳に感ずる時は、此の如し。まして、盗人ならぬ人をや、此の尼が行、おろかに似たれど、その清き心、よく人の不良を改めしむ。あはれ、人は、たゞ、己を正しくして、おのづからに、人を制せんにこそ。

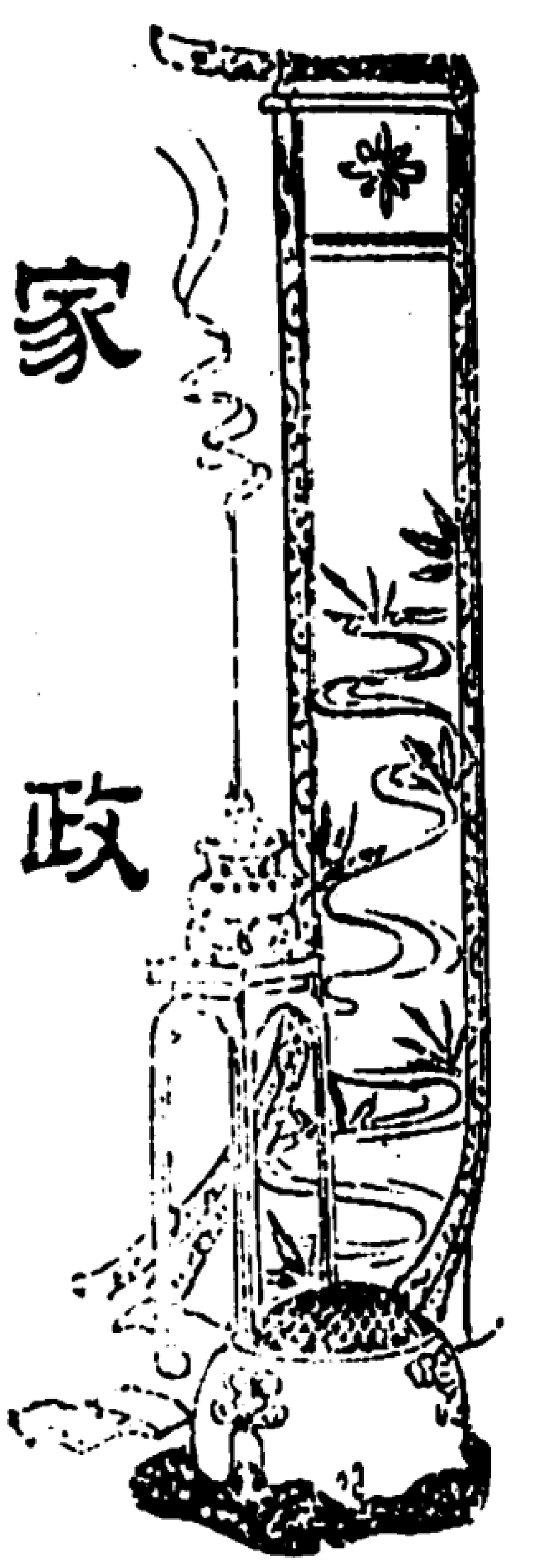


淺野吉長の妻

山本正周

淺野吉長の妻は、前田綱紀の女なり。女性の身ながらも、心ばへ雄々しく、能く馬に騎り、又、よく、眉尖刀を使ふ。淺野氏に適きて後は、安藝御前とぞ稱へける。吉長に從ひて、江戸の邸に住ひけるが、吉長は、ことの外、身の行ひ、正しからず、妓女を近け、少年を嬖し、日夜、婬酒に耽り、また、しば〳〵、北里に通ひけるが、妻は、之を、うたてき事に思ひ、しば〳〵、言を和げて、之を諫めけれども、夫の行は改まるべくも見えず。かくて、吉長は、參勤の期滿ちて、安藝へ歸らむとする時、嬖妾二人を携へ歸らむとしけるを、妻、また、言を盡して、之を諫めけるに、吉長は、いたく、腹立て、妻にも告げず、江戸の邸を出立しけれど、妻は、樓に上りて、夫の轎を見送り、やがて、深閨に入りて、一封の書を弟の前田某に遺して、自害し果にけり。此の時、とし、わづかに三十一なりしとぞ。





茶の湯

茶禮初學（前承）

孤峰庵祿仙齋不羨
閑　葦雄

一 獨客茶禮の事

次に、今は、假初に云へは、直、其の席小座敷にて、薄茶を點るに定る時は、主婦君、客婦に對し、薄茶は廣間の方にて、可差上心組之處、今日は俄に、半東の下婢、宿元の母病氣故、御日間を戴度申增故、外の事とも違ますから、彼方へ遣し舛た故、私は大に差支ましたけれ共、御茶約の事故、務るは務ましたなれども、終に、廣間の方迄、釜を掛る事は出來ませんで、此の處にて炭を直し、御薄を點舛売、先々、御寛々と云て、煙草盆を持出、さあ〳〵、御隨意に御喫煙可被遊抔と云ふべし。引續、釜の湯の煮加減を一見して、縱令、今は沸騰しつゝある釜の蓋を明れど、煮落るものなれど、炭取を持出、炭を直すべし。是、則、始の炭と差違はなけれ共、僅少、輕くすべし。香合も不替方よし。炭手前の順序は、屢、前號に敎授しあれば、爰に略す。客は香合換りたるや、否やを尋て、替りなければ、所望に不及、主婦君は、炭、濟たらば、座掃を持出、是も、輕く掃籠べし。次に主婦人も煙草盆を持出、適宜に莨艸を用ゆべし。底て、釜の煮塾したらば、薄茶具を運ぶに先立、薄茶菓子を出すべし。但し、其の品物は葛、種にて打もの〳〵類、麥、落雁、松風等、其の時々の氣候に適當

したる品物を撰ぶべし）偖、薄茶具を運び、薄茶を點ずべし、點じつゝ、客の寂寞からざる様に閑話茶談を爲すべし。併、他の雜話を交ゆべからず。又、咄しつゝあるも、言語、擧動を愼み、高尚優美に所置すべし。底で、薄茶を點るに先立、客は茶杓を取るを見て、菓子を取食すべし。薄茶點出したらば、客は主婦の君へ、一禮を述べ、御先へと云て進み出、茶椀を取、茶を呑むべし。呑終りたらば、茶椀を拜見すべし。餘り、永く不レ捻、直に返すべし。主婦人は、自身も相伴すべし。再服を不レ呑ば、直に御仕舞可レ被レ下と云て斷るべし。主婦人は、併、如何に可レ有レ之、湯にても可レ上杯と可レ云。自然、又、湯を好まれたらば、湯すゝぎの跡を茶巾にてふき、今一盃、湯を汲入、すゝぎて、飜し、直に湯を汲入、出すべし。茶の時は、是も、一つの故實なり。湯を好むは、主方、水の吟味を知る爲なり。利休居士醒が井の事共思ひ合べし、湯の跡へ、又、茶を好むは不良なり。獨客は、亭主も、必、相伴するもの也。總方薄茶喫し。終り、點茶、終りたらば、點前を取入るべし。水指の蓋い時、薄器の所望をなすべし。茶杓は不レ替ば、出すに不レ及、右、拜見は、水指を引て後、篤と拜見すべし。直に返すべし。亭主引に出たる時、結構なる棗なり、花押は、誰に候哉。如心齋にて、可レ有レ之、抔、見知分りたる分なれば、答て差問なし。次に客は、暇乞して歸るべし。挨拶振は、是も、前號にしるしたる如く慇懃に眞心を盡して、偖、今日の御茶は、難有奉存候。寛に、一同よき樂みを致ました、何れ、又、御後禮にも上り舛と云様に申謝すべし。主婦君は、何の風情も無之、御迷惑に、可有之、途中、御大事に抔云て、玄關迄送出可申候。（獨客終）

結方

中島義一寄

結方
烏帽子の懸緒結び根

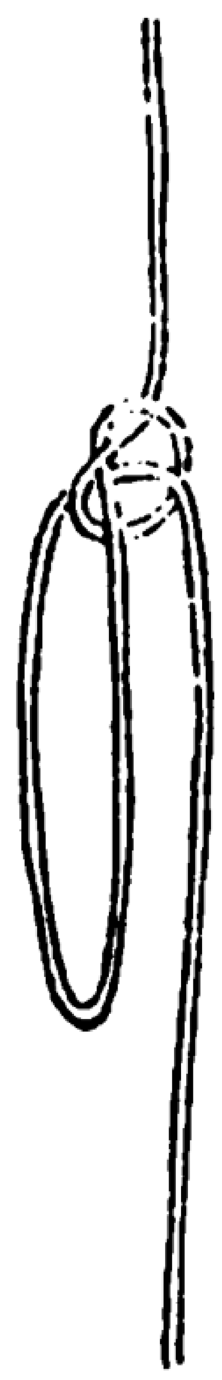


（表）

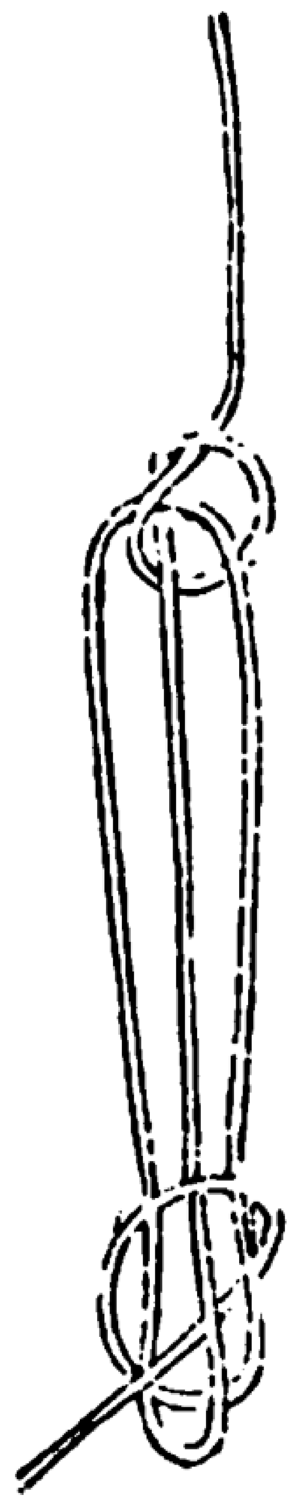


（裏）

むすび根先かくのごとし



次にかくのごとし



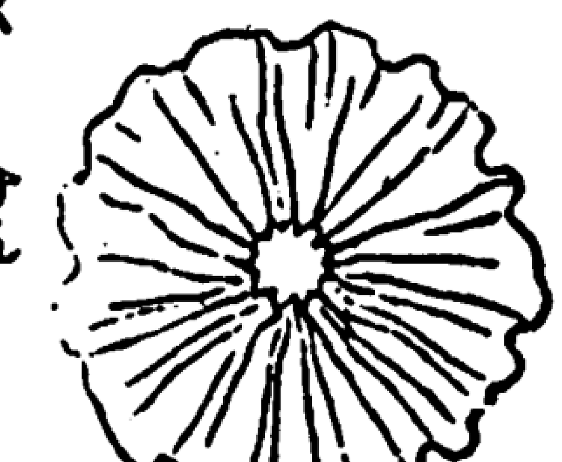
たちぬひ

西山たい子

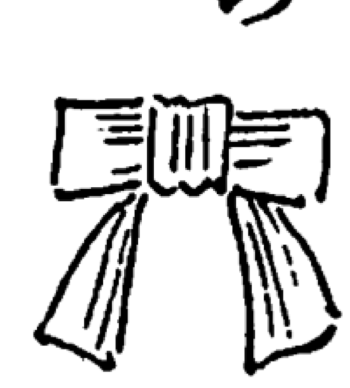
小兒の夏帽子

切は、すゞしからんため、かんれいしやをよしとす。まつ、巾一寸五分、長さ六尺ばかりに切りたるを、長く、眞二つに折りて、袋となし、切り目の方を、小針に、ぐるりとぬい、凡そ總長さの半分、即ち三尺ばかりに糸をひきて、いせおくべし。之は、ひさしのはしになるなり。それより、長さ、三尺、巾、一寸五分ばかりの切を、二つに切り、二つとも、其の一方のはしを、一分ばかり、ぐるりと、内がはに折り、丸く輪にして、ひさしのはしの切をはさみ、かへしばりにて、ぐるりとぬひつけ、そのはしを、一尺三四寸ばかりになる程にいせ、はりがねを輪にして、三すぢ通し、一つは、ひさ

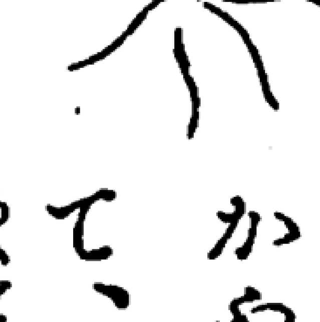
しのはし切をつけたる所より、三分ばかりはなれたる所に入れて、かへしぬりにてとめ、それより、五分ばかりはなして、又、一すぢ入れて、之もかへしぬりにてとめ、その次は、ぬひこみをとりたるはしに入るゝべし、之を總じてのひさしとす。それより、長さ二尺五寸、巾、四寸ばかりの切を輪にし、一方をこまかくぬひ、其の糸を、ぐつとしめよせ、中を、少しばかり。



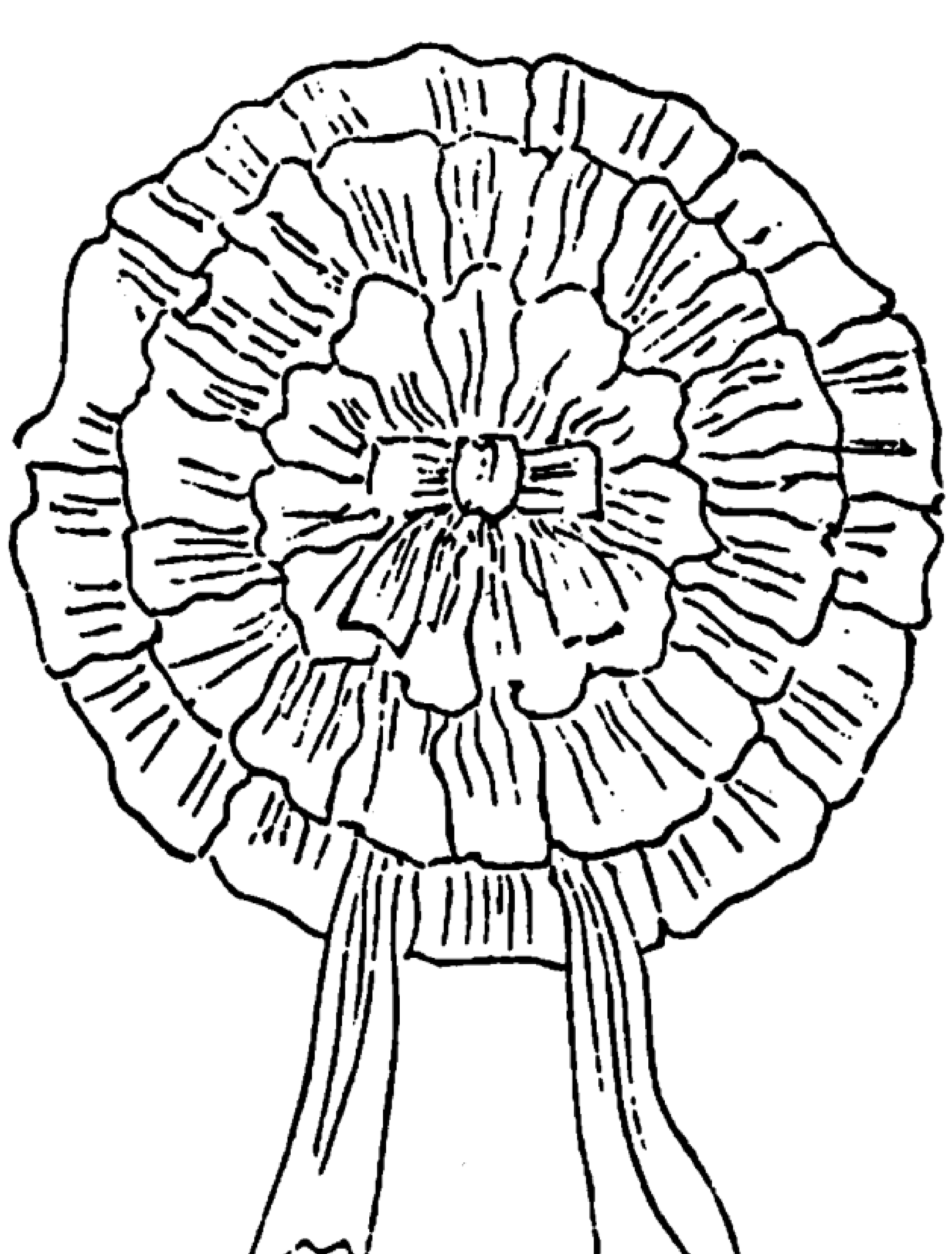
即ち、かはかりにいせてくゝりつけ、又、その一方をも、小針にぬひて、凡そ、一尺三四寸ばかりにいせ、巾、一寸、長さ、二尺ばかりの切れを、兩はし伏せ、兩はしとも、一尺三四寸にいせて、ひさしの切と、頂きの切とを、此の切のはしにぬひつけて合すべし。又ひさしの方に、かざりのため、別に、いせたる切をはさみこむもよし。それより、レースを、花の形に切り、又、うつくしからんため、赤き、青き等の切を、花形に切りて、レースの下にすかせ、頂の眞中にとぢつけ、リボン、又は、赤、青、紫等の繻子やうの切を、



上圖の形にむすびて、頂に閉ぢつけ、ひさしと頂との間にも、同じ切れを、ぐるりとまき、うしろにも、よきほどに垂らすべし。それより、裏の切、巾四寸、長さ、一尺三四寸の切を輪にして、



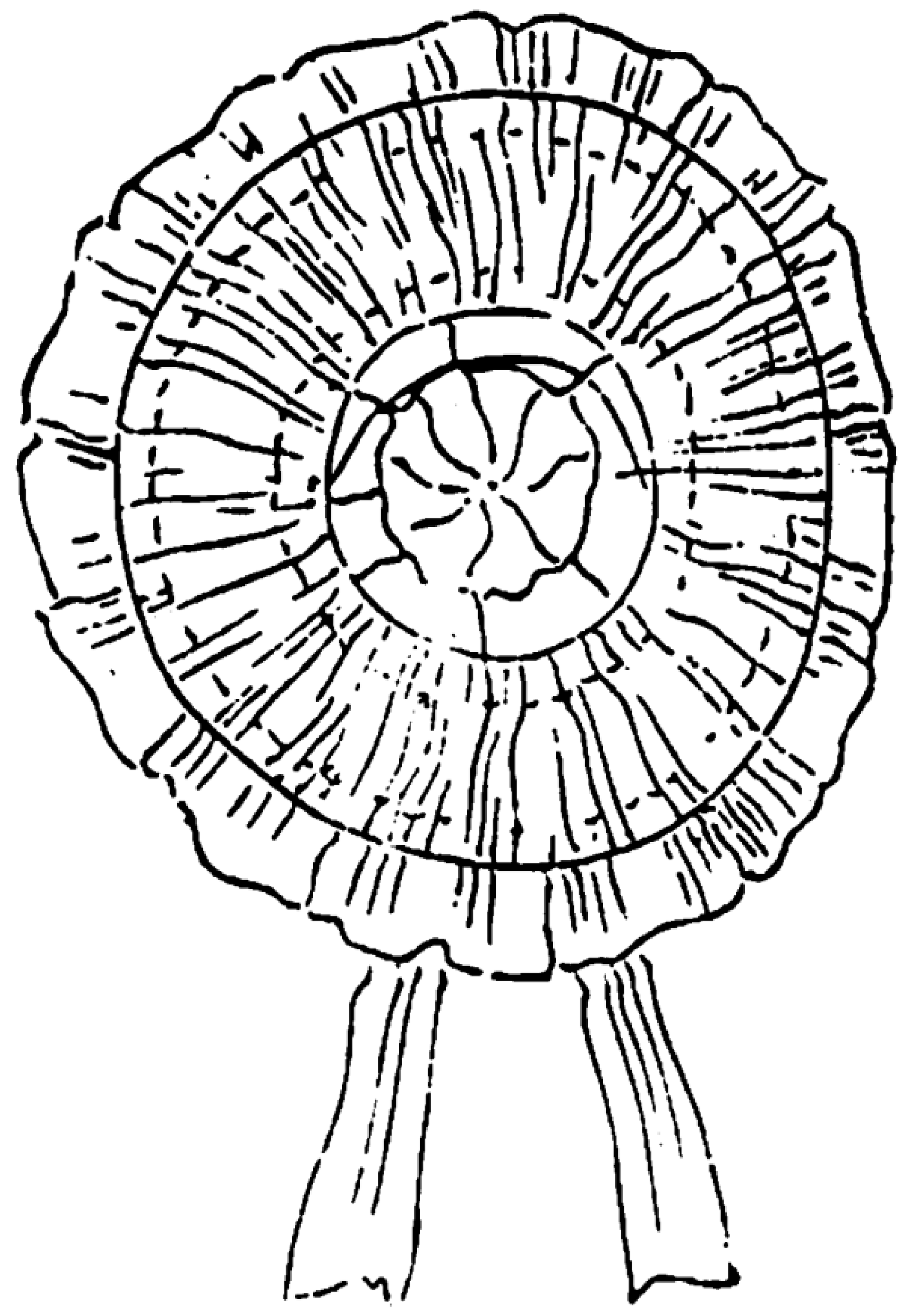
かやうに折り、はしを伏せて、ひさしの裏に閉ぢつくべし、但、その閉ぢつくる間に、ゴムの紐を通しおくべし。

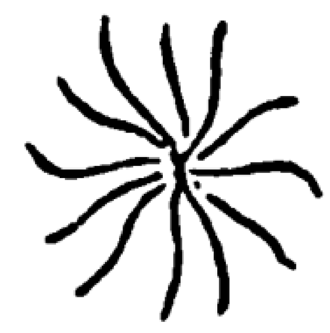


仕立上りの圖

(表の方)

（裏の方）





うらの折り方の圖

（はりがねを入れし所のかへしのしるし）

栄花園

（三）

八月さく花

○猫児眼睛草、澤漆、此の草の形、燭臺のごとき故、燭臺艸といふ、野に、多く、自然と生ずるなり。

○剪春羅、　春羅、漢宮春、眼皮は、俗字なり。さらさ眼皮、江白さきわけゑ。花の大きさ錢のごとし。

○虎尾花、　花白し、虎の尾のかたちに似たり。

○蠡顔、　鼓子花、旋花、又、はやひとくさともいふ。

○夕顔、　壺盧、瓠瓜、瓠の花ゑ。七月の初より、白き花開く、晝はゑぼみ、夕方に咲く故に、名く。

歌千首、　垣夕顔　　爲尹

なをざりの竹のあら垣末こへて
　夕かほうつむ道のべのさと

○瓠、　味、甘き故、苦瓠に對して、かんひやうと名く、形、色々あり。瓠のから物は、長ふくべなれ共、浪花、木津、難波、今宮、住吉ほとりに作るかんひやうは、皆、炭斗かたなり。一名盒盤葫蘆と云ふ、かんひやうといへど、瓢とかくべし。瓢は、ヒヤウの音にて浮の意也。わりて酒器に制りたるを、瓢といふ也。木は、匏瓠なり。ほしかたまりて、酒器などに制りたる瓢簞

といふにて知べし。

○干瓢務、新干瓢、土用中にむきてほす、河内、攝津に多し、伊勢より出せども、味おとる之。

○苦瓠、瓢蕈、夕顏と一類にして別種之。味にがし、

歌、夫木

おもしろく成ぞ行なるひさごもて

神のこゝろを汲て知るかな

○商陸花、花、白、赤あり。白花のものは、根も白し。

○山慈姑、俗に黑くわゐといふ、花、淡赤色、此の根、解毒丸に加ふ。

○鷺草、花、白く、鷺に似たり。連鷺艸は、葉、大、なり、花白して、鷺十羽斗、飛ぶ形に似たり。

○蒲穗、香蒲の穗の形、鉾に似たり。故に蒲鉾といふ。

○藿摩、花、紫、白色、秋、實を生ず、へちまのごとし、採綿にかえ用ゆ。

○緑豆、花黄之。和名やえなりといふ之。

○芡實、花紫、花の下に、實ならび生ず。

○赤草、水草、正字地錦也。花黄。

○慈姑、燕尾草と云ふ。形、燕の尾に似たり。根は白くわゐ也。一根に、歳に十二の子を生ず、澤瀉を、おもだかとして、古人の俳偕にもよみたり。誤りなり。澤瀉の和名は、なまいといふて、おもだかの名なし。

○蓮花、はちす（蓮房の蜂の巣に似たるゆへ名づく）白蓮、紅蓮、水芙蓉（異名）、花君子、藕花、水花、風露郎、池見草、露堪草。蓮は、泥より生して、しかも清淨なり。性糞溺を忌む。周茂叔が云く、菊は、花の隱逸なるもの之。牡丹は、花の富貴なるもの也。蓮は、花の君子なるものなりと。

歌、文治百首　西行

よそふなる月の御かほをやどす池に

ところをえてもさく蓮かな

山家、蓮滿レ池　慈鎮

おのづから月やどるべき隈もなし
池に蓮の花さきにけり

其の他、菱花、荷葉、蘭花、刈藺、席草、刈菅、藍刈、楢茂、青田、田草取、蘆茂、早桃、青鬼燈、青蕃椒、蘘荷子、凌霄花、鳳蘭、汐見坂、神馬藻、豇豆、瓜、甜瓜、瓜皮、白梵天、干瓜、熟瓜、菜瓜、南瓜、南京瓜、阿右陀瓜、楮花、紫蘇、蒜根、葫荽、鷄突、夏切茶、などは、今さかりに咲けり。

秋蒔の菜花

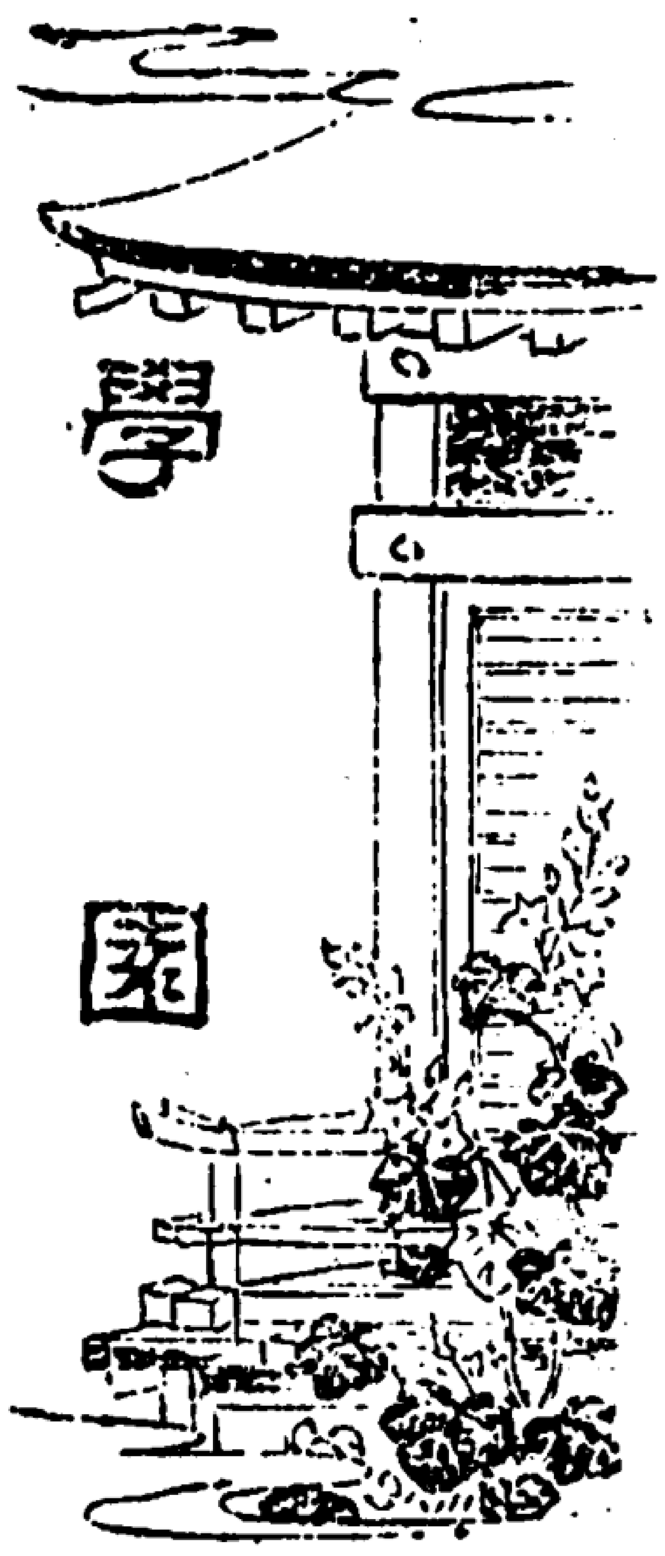
秋蒔の菜花は、いとも、多し、なかに、ものすやしきもの、一ッ二ッを揚げむとてなむ。

胡蘿蔔

種類多し、中にも、瀧の川。金時。札幌。新船來大長、洋アーレー、スカーレット、ホーン、ルージユ、テヨロング。ニユナン。ナニー。などは、世の人の知る所なり。其の栽培法は、先づ、懇切に深耕したる畑地に、六月乃至八月頃、足跡に、韮目に、播種するものあり。或は、條播となし、生長する後、間引くものあり。或は平畦に、巾廣く、條播となすものもあれども、碁目に點播するを可とす。其の方法は、原肥の傍に、一株十五粒つゝ、播種砂、碎細麥稈、並に種子を混じて、蒔くものあり。或は撫種後、畑地、一面に麥稈を敷くも可なり。此の作物は、播、及、發芽、當時に於て、高温度を有する氣候に相遇するか故に、尤も、困難を感ずるものにして、播種、其の當を得ざれば、發芽を誤り、發芽後の管理、宜しきを得ざれば、枯死せしむ、通常、播種後十日を經ば發芽すべきも、其の間、乾燥すれば、夕刻水を與ふべし。播種後、二十四五日を經て、葉、細繊にして、伸長、宜きもの二本を殘し、尚は十四五日を經て、一本となすべし。亦、外國種中、早生短小なるは、春季より順次に條播とするを利ありとす、蓋し、性小なるが故なり。已に、間引きて、一本となしたる後は、手數を要すること、甚た少なし。

花菖蒲は、今、移植する時なるが、其の種類に、座間、

森、狂獅子、蝦夷錦、酔美人、千羽鶴、笑布袋、雲衣稱、萬里響、葵の上、四方權、七福神、夕霞、秀紫、酒中花、大鳥毛、興津白浪、雲の上、玉照君、白瀧、五節舟、月下浪、五月雨、蛇籠浪、鶴鵲樓、加茂川、萬臺浪、岩井城、連城璧、大淀、立田川、折鶴、鳳凰城、鬼鵲、磯の浪、歸雁操、獅子怒、鏡臺山、潮の烟、霽間空、眞鶴綾瀬川、舞鶴龍、宇宙、鶴毛衣などあり。是等を植うるには、事もなきものにて、池ならでも、濕氣のはげし所を撰て、移しときは、生長、甚だ速し。



秀歌集（四十七）

鹽井正男

○

よし野山やがて出でじと思ふ身を
　はなちりなばと人や待つらむ

○これは、西行法師のよめるなり。山家集雜歌の部にあり。○よし野山。よし野山を出でじといひつゞくなり。○やがて。そのまゝにといふ意なり。即ち、入りたる、其のまゝにといふ意なり。入りたるまゝに、最早この吉野山を出でじといふなり。○思ふ身を、思ふ、我が身をといふにて、身とは、我身をいへるなり。○花ちりなぞと、花ちりなぞの下に、出で來むといふやうなる詞をはぶきたるにて、花が散つたならば、吉野山を出でて、歸り來るならむとといふ意なり。○人や待つらむ。故郷の人は、我身を待つらむといふなり。

○一首の意は、入りたるまゝに、最早、この吉野山を出でまい、このまゝにこの山にこもりはてむと思ひ居る、我身を、故郷の人は、さる、我心は知らずして、花が散つたならぞ、吉野山をも出でて歸り

來たらむと、故郷の人は、我を待つらうといふ意にて、詞のいひまはしの妙は、いはずもあれ、一首の情景、誠に哀れに身にしみておぼゆ。

○

山人よ吉野のおくにしるべせよ
　　花もたづねむまた思ひあり

○これも、同人のなり。前のとおなじ所にあり。吉野山に入らむとする時よめるものならむ。○山人よ、山人よと呼びかけたる詞なり。山人とは、單に、山に住める人をいへるにて、吉野山に住める人をさしたるなり。○しるべせよ。我を、吉野山の奥に案内してくれよとあつらへたる詞なり。○花もたづねむ。もといふ詞のはたらきを味へよ。花もたづねんと思ひ、また他の思ひもある意なり。○また思ひあり。花をたづねんと思ふ上に、また他の思ふ事ありて、山に入らまほしきよしをいへるなり。また、思ひありといへる思ひは、世をのがれて、その山にこもり入らむと思ふよしなるべし。

○一首の意は、山人よ、我を吉野山の奥にしるべしてくれよ、その山の名だかき花も尋ねやうと思ひまた、別に、この吉野山の奥の清靜かなる所にこそ、世をのがれてこもり入らむと思ふ。それ故に案内してくれよといふ意をいへるなり、花もたづねむ、また思ひありといへる情より、詞のいひまはし、誠に一かど新しく、凡ならぬ所あるは、此の法師の得意のふしなりや。

○

君いなば月まつとてもながめやらむ
　　あづまの方の夕ぐれの空

○これも、おなじ法師の歌にて、仝集、仝部にあり。あひ知りたりける人の陸奥へまかりけるに、別れの歌とてよめるなり。○君いなば。君が、陸奥の方へ行きなばといふ意なり。○月まつとても。月を待つといひてもといふやうなる意なり。月の出づる

を待つて居るなりといつて、マアーといふ意なり。○ながめやらむ。　つく〴〵と思ひて見わたさむ意なり。○あづまの方。　あづまとは、日本武尊が、橘媛を追懷したまへるみ詞より出でて、東國をいへることは、よく人の知れる如し。故に、東國の方といふことなり。○夕ぐれの空。　夕ぐれの空を　いふ意にて、上へかへりて、ながめやらむに、かゝるなり。

○一首の意は、君が、陸奥へ行き給はむ、我は戀ひしき故に、夕ぐれは、君が居る東國の方の空を、月を待つといひて、マアー、其の實は、君を思ひて、つく〴〵となかめてあらむ。夕ぐれは、月にかこづけて、君の方を思ひながめてあらむといふ意にて、別れては戀ひしきこゝろなり。

○

程ふれどおなじ都の内だにも
　おぼつかなさは問はまほしきに

○これも、仝じ法師のよめるにて、仝集仝部にあり遠く修行に思ひ立ちたる時、人々の別れを惜みて來たりて、遠行別といふ心をよみなどしける時によめるなり。○程ふれど。　時日たてばといふことなり即ち、あはずして、多くの時日をすぐれどといふ意なり。○都の内だにも。　俗に都の内でもといふ意なり。○おぼつかなさ。たよりなくおぼゆる心をいふなり。故に心細き意にもいふなり。親しき人に、久しくあはずに居れば、たよりなくおぼゆる心をいふなり。○問はまほしきに。　其の人をたづねとひたく覺ゆるにいふ詞にて、其の末に、まして、かく、遠く別れゆけど、いよ〳〵たよりなく思ばゆる心の中を思ひやりてよといふやうなる意を含めのこしたるなり。

○一首の意は、あはずに、久しく時日を經れば、おなじ都の中に住んででも、なほたよりなくおぼえてたづねとひたくおぼゆるものを、かく、遠く、別れ

ゆけど、いかでかりか、我はたよりなくおぼゆらむ、この心の中の細さを思ひやりてたまはれといふことにて、誠にうるはしき至情を、やさしくもうたひたりや。且つ、その調といひ、餘韻といひ、限りなき妙あるを味へ見よ、

布美安波勢

白松園主人

十一月

水とり

左勝　祝之

あさひのかげさしわたれるほど、何とのうすらひ、いさゝかひまみえそめたるに、鳰とりども、やう／＼、洋すのもとはなれ出でたれど、猶みぎはのこほりかづきかねたるさま、いとさむげなり。

右　保世

思ふ人の、かならずとちぎりし夜なれど、いまやきまさんとおもひつゝまつに、いたづらに、ふけぬめり。ものしづかになりて、ともし火も思ひの涙にくもるにやあらむ、ほのぐらきに、外のかたに音するは、きませしにやと、やをら妻戸おしあけて見れど、それならで、廿日の月やう／＼さし出で、池の面さやかに、ともねのをし鳥の見ゐけるは、うは毛の霜はらひけむ音を、きゝまがへたるなりと、そのさまをみるにも、思ひの數にそへられて。

評判　左の文、水とりのさまをよくかきえたり。右の文は、ひとわたりみれどよろしげなれど、心とゞめて思ふに、いかにぞやればゆるふしれほし、まけぬべし。

左勝　何文

このころは、思ふ人のおとづれうちたえたれど、いかなることにかとおぼつかなう、ちぎりし言の葉のかれも行にやと、こゝろぐるしう、うちふしつゝわかしく

らすを、めのわらはがいさめて、かの思ひ給ふ、御わたりには、おほやけごとやなにやと、御さはりがちにて、えきまさぬなるべし。あすあさてのほどには、御せうそこもありなん、いたうなげきたまひそ、はたこよひは、冬ながらすさまじうもあらぬ。月夜にはべれど、心やりにながめたまへとて、さうじあけたる心さま、いとあはれにらうたくて、をぞすて山にはあらねどといひつゝ、やをらいざり出て見れど、げに、月はいとさやかなりけり。ぜんざいは冬かれてくまとなるべき蔭もなく、ちりしきたる木の葉は、霜にきらめき、池のあしは、かれはに風あたりてさら〳〵と音するなど、かれもこれも思ひのつまとなりて、いとかなしう、涙もおちそひぬ。をりしもをし鳥の鳴く聲きこゆれど、なれも妻をこふにやとみやるに、さにはあらで、めとりをとりふたつならびて、池のきしべを、そこゝとあさりするなり。かゝる鳥だにも、いもせのちぎりふかう、なからひの、かくむつまじき物をとおもふに、いとゞこひしさもまさりて。

右　清風

曉の空に、千鳥のあはれになく、ひとりねざめの床もたのもしと、ひとりごちつゝ、西の妻戸をおしあけて、外の方をみいでたれば、入かたの月のものすごく、冬がれの前栽には、霜こちたうおきて、そゞろさむきよのさまなりけり。こなたの池にはおほくの水鳥の、つがひはなれぬが中に、つままぎかねしをし鳥の、よるはすがらにひとりねのいかにさむからんと、いとかなしうて、おつる涙をかいはらひつゝ、ひきいりてふしぬ。

評判　左の文、いと長きに、よくかきえたり、いみじき文かきのしわざとぞ見えたる、右の文もめでたけれど、おとりぬべし。

左　徳

風ふきあれて、いたうさゆる夜の、やゝふくるほどに、池にあされるをしかもども、かたみにわびしうなきか

はして、たちさわげる羽音なで、身にしみわたれるは、うきねの床やこほれるならんと、おもひやられ〻あはれなりけり。

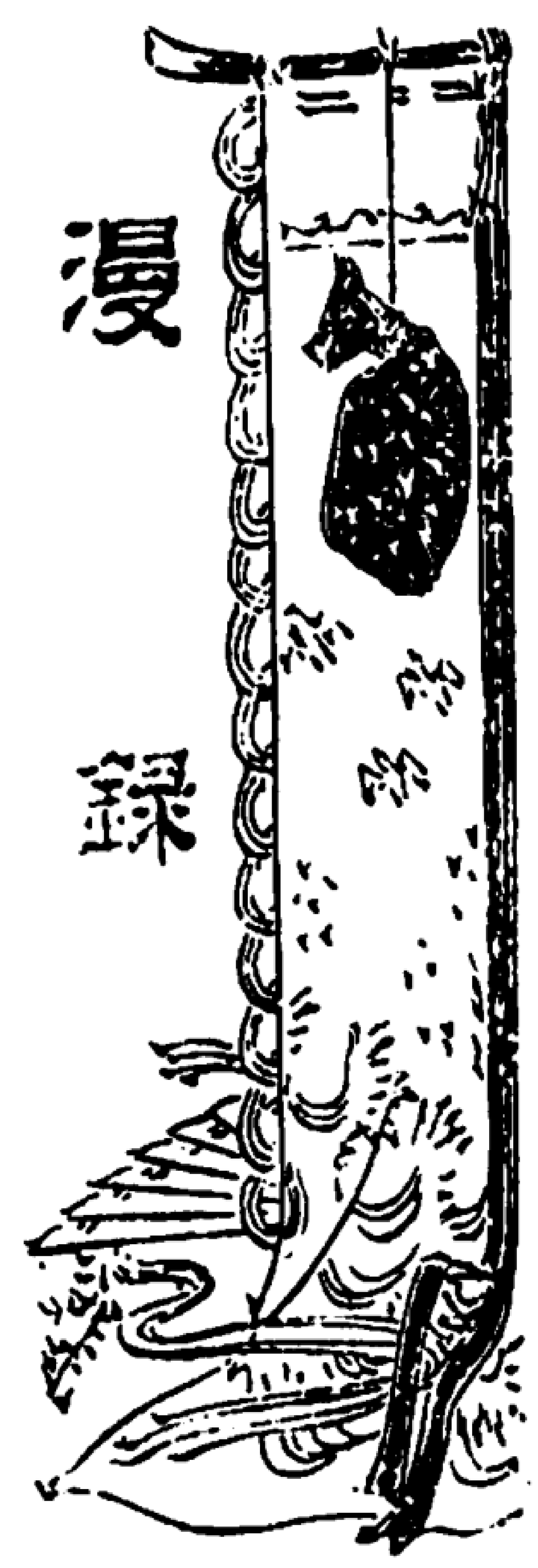
右勝　　　重豊

かもめのひとむれ、はるかにとびゆくを、やがでこなたなるが聲あはせたれば、ほどもなくおちきて、ともにつばさうちぬらしつ〻、むつれあひて、およぎありくさまども、まことにそこひなきこ〻ろやすさにてぞ。

評判　左の文、てつ〻なる詞づかひまじりたり。右のふみはをかしかちとす。



（未完）



漫録

讀人名（續）

釋法忍

女の身に、七ツのふせうと申しは、一には、舅姑にしたがはず、おろそかなれはさられ、ねだみふかくれぞさられ、言葉多きはさられ、いんよくふかきはさられ、子無はさられ、あくしつのやまいあるはさられ、ぬすみするはさらる〻はずの習にて候へば、人のつまとなりて　、此の七つのつ〻しみかんようにて、おはしまし候。しかし、子なきこと、あく病の御奉公にさし上ん心かけにて、三味線の舞のと、藝をならはするたくひ、あまたればしまし候、是も、舞子と名付、此の道の指南を渡世とする、俗の藝者にて、多くの人の娘

を引請、藝を教ふる事にて候。江戸などにも、おりふしはありけるが、これらの稽古も、その親々心を付ざれど、身持わしくなり。藝古をかこつけに、をとこくるひをいたし、御奉公はさて置、身をはたし、おや〳〵に、歎をかくる樣になり行ものに候へは、つねく、心を付、十二三よりは、稽古の行かよひに、人を付、又、人なき方は、母御にても付そひ給ひ、とかく不埒なき樣に御心掛、專一に、おはしまし候。惣じての事、前方の用心こそ、肝要にて、おはしまし候、事破れ候上にて、それこれと、心を付るは、うき世のならひにて、何のやくにたゝぬ事に候。子共、ひとりをそたつるには、多くの苦勞をして、そたて上げ、多分の物を入て、藝をならはせ、かんじんの役にもたつべき時分、ひとりの、娘を、だいなしにして、取手方角もなき樣になりし人も、世の中に、あまた有る事にて候へば、よく〳〵御心得、藝、けいこの間には、女の道のふみをもよませ、をしへ道びき心のうはきにならぬ樣に御そだて候事、專一にておはしまし候。さて婢子、藝子の類も、あまりはすはなるは、一だんの座の興にはよけれども、さめやすきものに候。さればとて、ねいり樣なるは、またよからず、これらはすべて、御大名樣方の、御慰に召かゝへらるゝ事に候へば、藝に付ては、いか樣にもあれ、一躰、女は、女の情をふくみ、物こと、やさしく、しとやかに、志まことあらんこそ、すゑたのみある御事にて、おはしまし候まゝ、仕立から隨分、御心付玉ふこと肝要に候、また娘子達も、此のふみの赴よく〳〵わきまへ給ひ、すゑずゑ御身のうへめてたく、御榮へ候樣御心かけられよかし。これ孝行の第一にて、おはしまし候也。

上々樣方へ、御奉公に出られ候御娘方は、隨分身をつゝしみ、御れんちう樣、奥樣へ、まことをつくして、御つとめ、いさゝかもつとめに、わたくしなふ物でと大切に心懸、御主人樣の御ためには、いのちもおしまず、心をかたむけみやつかひいたし、惣じて、身持よ

ぶしくせう〳〵になされ、言の葉つかひ、立ふるまひともに、しとやかに、かりにも、はしたなきわざなきやうに、心懸給ふべし。さて、又、はうばいの女中衆へ、あい〳〵しく、したしみ、なにとも、こさんの方へとひ合せ、念入れてつとめ給ふべし。御夜つめの折から、たいくつなるふせいなく、ねむたけなるかほむきせず、用もなきに、そらたちし、給はず、随分、しんぞうし給ふべし。萬一、御前様、又は、御局方より、はうはいしゆのこと、御たづねあらば、よろしく取なし給ふべし。わが身のりつしんせんとて、人のあくじを、第一、御尋もなきに、人のうはさなど申上候事、かへすかへすも有べからず、かへりて、身のためよろしからず候まゝ、よく〳〵御心得して、たとひ、われより下の人、折をえて、りつしんあるとも、かならず、ひがみたる心を出さず、ねたみ、そねむ事なく、わが身のつとめ方よろしからぬ所有るべしと、心得、いよ〳〵、身をつゝしみ、まとを、つくし大切に、つとめよかし。

奉公する身は、つとめの外に、はうばいの氣かねも有、人のそねみ、にくみも、心ならずうくる事もあるならひにて候へど、ものこと、たゞかんにんをせん一にして、あらき事なく、やはらかに、うつくしうとりはからひ、いよ〳〵、身をつゝしみ、上下へ、まことをつくせど、しせんに、人のうたがひもとけ、身のあかりもたつ事に候へど、たとひ、人より、あしくあたるとも、こなたにては、それにならはず、随分、ていねいをつくし給ふべし。然る時は、をのつから、せんあくわかり、こなたに、害なきものにおはしまし候まゝ、是らの事ども、能々、御心得して、心を直に身をつゝしみ、御つとめ玉へよ。世の中にまよひ安きは、色と欲との、二ッにておわしまし候へば、おとこおんなにかぎらず、おさなき時より、此の二道に、いましむべき事にておはしまし候。ことに女は、おとこに先立、十三のとしより、はや、精氣うごき出、色の道のさとりはやく、此の道におゐては、文珠も、およばぬほどに

智恵さかしく、唯、一筋におもひ込、實もあつく、情深く、戀には、命もおしまぬは、女子の情なり。されど、年ゆかぬ娘達に歌舞妓、芝居見せたふなく、いせものかたりを、えんりよするは、こゝの事にて侍ふ也。元來、持りやうの色情をさそひ出し、心をみだすものなれど、その身は申におよはず、親々たちの、御心得有るべき事にて、おわしまし候。わげて、御屋敷様方へ、御奉公の人々は、男女にかぎらず、不義いたつらも候へば、ふたりとも命をうしなひ玉ふは、いつれの御屋敷とても、御大法にて、のかれがたき御事におはしまし候まゝ、わけて、御つゝしみせん一の事に候。尤、奥向にて、男の交りはなきものなれば、さやうのいたづらとは、有ましけれども、或は、御代參、或は、御使、又は、宿下りなどの節、いろ〳〵の手を作り、地獄のうへの一足飛とやらんあやうき事もおもひ付ず、迷ふは、色の習ひにて、名をくだし、身を失ひしも、世上にあるならひにて、おそろしく、かなしき事におはしまし候。第一、御屋敷方につとめ玉ふ御女中かた様の方うは氣を申さむ、芝居役者に贔負〳〵あつて、てんでに、そのやくしや紋所を、手まへ〳〵の小袖にも、扇子にも付け、あるひは、ようしさしに、歌書いてもらふの、あふぎに發句書いてもらふのと、よそ目もはぢず、ちうやその事のみに、心をよせ、よりあつまりては、たがいに、役者の評判して、たれがためにいさかひ、なき合玉ふ、是、その役者のかたへ通じ、よろこぶにもあらず、こなたを、夢にも志らぬ役者を、こなたよりは親兄弟より、大切におもひ、身も、世も、あられぬ思ひをなすは、いかなる事ぞとかんかふるに、みな、色情ふかきより、その役者の面体風俗になづみ、おもひ内にあれど、色外にあらはれ、われをわすれ、つゝしみ、第一のつとめをかへりみず、人の見る目もはぢず、すいた役者の紋を付、その役者を、少しもあしくいふかたをば、あだかたきの様におもひ、まことを盡すべきほうばい中と、中あしくするなど、これはとのうは

氣は、おはしまさず、まことにゑんかうの水の月をのそむよりもつたなき志にて、おはしまし候、是らの、はしたなき心より、御奉公も、次になして、いろ〳〵の惡事もおこり、身をうしなふもとひとなりまいらせ候まゝ、もしや、さ樣の御心もおはしまず御方は、今より、ふつと、御改め遊し候べし。それかしが、かく申も、嘸々、いわれざるとのやう、にくましく、おぼしめし候はんなれども、かようの事にて、御れき〳〵がたの、御身をうたせられ候へど、世上によからぬ事の出來候はぬ樣にいたしたくかねて、御心得にもならんかと、かく耳いたき御事までかきつらねまいらせ候まゝ、たとへ、はらわしくおぼしめし候とも、それがしか心を御汲分け、あやまりある御方は、早速御改め下さるべし。なほ追々、女の道をあらはし、善惡ともにのべわかしまいらせ候まゝ、とくと御覽下さるべし。穴かしこ〳〵

世の人をすくはむためにすつる身は
よそにそしらん名をもいとはず

いへかふるむねのやまひにあてゝしれ
口ににかきぞ身のくすりとは

（巻の一終）

主從心得草（承前）

諏訪忠元

ある人いはく、村田一統、其の外、大店向にも、毎月、一度宛寄合を定て、御先祖の掟をよみきかせ、御先祖の通りに相守るべき樣に申し渡す、是によつて、髮の結ひやう、羽織の着やう、衣服の調へやう、異風なきやう、葉手ならぬやうにする也。若、異風を好む者あれど、其の元は、御先祖の風儀にあらぬ故に、此の店には、御斷り申す、いつれへなり共、御越あれと、店中、相談の上、其の人を追のけ、又、外の人を支配人とすると聞く、是、よき掟也。異風は至つて、わろし、髮の給やう、きり下げ、やつこ、あつひん、又は、衣服抔

の異風、縞がら等、あまり目に立ぬやう、華手ならぬやうにすべし、歌に

　はやるとてはでな姿を好むなよ
　　いつもすたらぬ風を見ならへ

と、此の歌の通りに、身を持べし、武士は、武士の風がよし。百姓町人は、百姓町人の風がよろしきなり。兎角、其の分に應じて、其の家の掟を守るが專要也。其の家の風儀を守れば、あまり惡敷事はなき者也。兎角身分相應の事がよき也。武士は、武士の二字、町人百姓は、町人百姓の二字、出家、醫者、儒者、共に、二字を忘れぬやうにすべし。然るに、己が職分の二字を忘れて、武士が、町人の眞似を致し、商を之たがり。町人が武士の眞似を之て、馬にのり。弓を挽き、靭、打杯するは、滅亡の基也。又は作り苗氏、新田事、至つてわろし、兎角、其の家々の風儀を失なはぬやうにすべし。我身を大事と思ひ、行末安穩に暮さんと思ふ人は、御先祖の風儀を守り、我儘をする事なかれ、夜更し、朝寐する事なかれ。大酒色好みする事勿れ。唯家業を出精して、儉約を守り、少しも油斷なく、主に忠義、親に孝行を致すべし。老人は、元より、年上、目上の人を急度敬ふべし。又、高位、高官の御人に、決して、御無禮なきやうにすべし。又天下の掟、家の作法に、少しも背くべからず、若背く時に、大なる禍ひに逢ふべし。又、忠義、孝行を專に之て、高位、高官、老人を敬ひ、一切の掟を、よく守るに於ては、我身の安心、福徳、此上は有るべからず、右之條々、急度相守るべき事肝要なり。

　正直に家業大事に御法度を
　　守る心がすぐに極樂

　御法度を之りつゝつのる我惡事
　　其の行末を地ごくとはいふ

此の歌を忘るべからず、若、忘れなば、一身の置どころなし。

江州、勢州、三州等の國々より、十二三になる子供を

奉公に出す、春にもなれば、子供が三十人、五十人はども、一所に、江戸へ下つて、四十、五十位の男が、二三人も付て居て、世話をして、連てくる子供のわらんじを、五十足も、百足も、持て居て、きれるとはきかへさせ〳〵、世話をして、連てくる、春になると、幾組も〳〵、江戸に來る遠方へ手はなしてよこすからして、親達は大案事也。江戸は、火事のよくある所じやけな、怪我あやまちでもせねばよいがと、風の吹につけ、日の照につけても案事煩ふ事ばかり也。烏の啼ぬ日はあれ共、我子の事を思ひ出さぬ日とては、一日もない、どふぞ、息災で首尾能出世して呉ればよいがと、何所の佛神へ參詣しても、我身の事は願はずして、唯我子の、息災延命出世するやうにと計り願ふ也。どふぞ。達者でつとむるやうにと、是のみ案事くらして居る也。何所、其所のむすこは、江戸へ行と、直に死んだ、何所のむすこは越後屋、白木屋、大丸の番頭と迄なつたれ共、辛抱がわるくて、金銀を遣ひこみ、しくじつて、今は何處に居るかしれぬげなど評判し、又、たま〳〵、辛抱を、よく仕遂て、親の賣た田地を買戻し、在所の家も造り直し、親達を安心に養ひて、近所、近邊のほめ事のむすこもあると、よい事を聞くにつけ、わるい事を聞くにつけ、案事煩ふ事ばかり也。然るに、あるむすこ、辛抱をよくして、勤た故に、番頭となり、一年も過ると、中登りなり、サア其の年が來て、いつの幾日には參りますといふ手紙が來た故に、父母は飛立嬉しさ、近所隣へふれまはす、誰聞ふともいはぬに、私等がむすこは、首尾好出世して、何月幾日には參りますとふれ廻してありく、サア其の年が來て、明日は、彌彌來るといふからして、兼て、一家親類の衆が迎に行、母の思ふやうは、幼少時は、何々がすきであつたの、其の好な物が調へてふるまいたい、強飯がすき、牡丹餅も好であつた故に、是を調へてふるまいませう。肴は、何々とむすこのよろこぶ事を考へ居る。是は母の大慈悲でござります。扨、小豆飯も好であつたから、先、

今日は、是を調へて、進せませうと、小豆飯を焚て居る所へ、人が來て、只今むすこ殿が見へます。モウ半道むかりといふ。御袋は、是を聞て、御飯の焚たも、にへぬにもかまはずと、火焚場より、直にかけ出して、むすこの來る道筋へ、迎にゆく、また見へぬ、かうして段々と行内に、十町計りもゆかれた、そふすると向ふから、笠をかぶりて見ゐる、ほど近くなつて、能々見れば、大きくはなりたれ共、雅な顔がある故に、是はむすことしる。むすこも、御袋と見て、笠をぬぎ、腰をかゝめて母様御きげんよく、御出なされて、お目出度存しますといふ、母も、よう辛抱して來て下された、大きくなつたといふた計りで、跡は嬉し泪に伏ししづむ、互に物はいわれずして、うれしさのあまりに、先達者は泪也。此の時母のうれしさは、どのやうにあろうと思し召す。一生の内に跡にも先にもない所のうれしさ也。又は家のやぶれを直し、座舗のうすべりをかへ、障子の切はりまでして、我子の來た時には、あまり見苦敷所を見せまいと、家内屋敷迄きれいに掃除をして待所に、約束の違り、子息が來た故に、其の悦びいわん方なし、天へも登るうれしさ也。世の中に、久しぶりにて親子の對面ほどうれしき事は、又と、あるべからず、嬉し泪にむせぶも道理、千萬也。人々、親子の心をくみわけて、貰ひ泪も人情なり。

はゝその露

はゝそ

これは、もう、とうに、母さまにお聞きになりしや、先生がお話しになつたかもぞんじませねど、孃たちには、かんじんかなめの心がけとぞんじますから、まう一度、此のはゝそかおはなしを致さうと思ひます。定めし、ごぞんじの方には、くどいはゝそよ、もう聞いたとおぼすならん、今一度、耳をあけて、聞いておひて下さい、皆様も、御ぞんじの、右府、織田信長公と申します人

は、智勇すぐれておはします大將で居られましたが、ある時、誰れでもまゐれと仰せられました。はいとの答へと共に、おそば役をしてをりました、お小性の一人が、立つてまゐりまして、何の御用にやと仰をまちました。

さのみの御用事でもなかつたと見えまして、もうよしと仰せられましたから、お小性はそのまゝ、御前をすべりのきました。さてあとで、又、何御用か、誰にてもまゐれとお呼びになります。はいとの答へと共に、また、外の一人のお小性が、立つてまゐり、かしこまりて、仰せをまつてをりました、しばらくして、またよし、もういらぬと仰せられましたから、そのお小性も、また、そのまゝにまかりのきました。

なほ、何御用のありてか、又や、誰れにても、これに來よと仰せられましたから、又、他のお小性がすべり出まして、つゝしんで御用を伺ひますれど、何とおほしてにや、之れにもまたよしと仰せられました、幾度もいへむへにして、云はざる君が御心は、そも何を思召すにや、お小性は、なほもかしこまりて、まかり出



でやうと致しました手のもと、信長公のお膝近くに、小さごみがございました。お小性は、そのごみを拾つて、さてまかり出やうと致しますと、信長公は、見そなはして、や丶、まて、語る事のあるよ、さても、其の方は奇特もの、よく心づくよ、すべて人は、心と氣とをはたらかすのを以てよしとするなり。武邊とて、たゞつよく、たゞ弓をひき、長刀をつかふばかりにはなきぞよ、か丶るも、ひくも、時のしほあいをよくはかるが合戰の習ひなり。ひくべき汐に船を出せしとて、やがて、水は汗て、船は、にわかに、ひきつけられしやうに、ひきつきて、につちも、さつちも行かずなるやうなものぞ、武にも文にも、氣をはたらかすが、たゞかんじんである。其方が、只今、たゞ手を空しうして立ち去らんとはせで、小さごみに、心をくばりたるは、實に、しをらしい、感心の事であるとて、いたくおほめになされたりとなむ。武邊ばかりではありません、人間は、何でも、氣をはたらかせなければなりません、ましで女子は、こまかき所にも氣をつけ、心をくばり、姑につかへ、夫にかしづき、世のためをも思はねばなりません。信長公の、此の仰せは、誰に、ひめたちへのよき敎でありますと思ひまして、此處にれはなし致したのであります。

競點歌（第二十五回）

諏訪忠元

阿部光忠君評

春夜待友　津輕承昭

またれつる友もとへかし朧夜の
月もさし枝の梅の下道

初句をわがまたんトシ結局ヲ梅の下庵ト改バヤ

前田利嗣

契らねとおとのふ人そまたれける
梅か香さそふ春の夜風に

荒山德隣

語りあふ友はしきまて梅咲て
月も朧ろに霞む夜半哉

海老原秀之

友人をまつ間そつらき春の夜の
月の霞みて見えわかぬとは

初二ノ句ヲ友まつもわひしかりけりトシ、結句ヲ、みちしわかねハナド、玉ヒテハ如何

増山三雪子

きのふまてうとみし友も何となく
心のどかに待わぶるかな

三句ヲまたれけりトシ、下ノ句ヲ心のとけき朧月夜はナド改メ玉ハヾヤト承リ侍リヌ

増山喜三子

獨りしてみるはあたらし春の夜の
月と花とをとふ人もかな

初句われひとりトシ玉ヒテハ如何

増山正治

春の夜のおぼろに霞む月見ても
契りし友のまち侘る哉

下ノ句、歌よむ友のまたれける哉ナド改め玉はゞ、イトメデタキ御歌ナランカ

青木修

○そこはかと梅か香かよふ春のよは
言葉かたきの友ぞまたるゝ

南部朋子

○おもしろき月と梅とにはしとみも
おろしかねつゝ人ぞ待るゝ

二ノ句梅ハ花トシ玉フ方、殊更調モヨク聞ユ可ヤ

南部利恭

春のよは月と花とに成ぬれと
昔のとも丶とはぬなりけり

春のよの月と花とは霞めども昔の友はとはんともせずナドニヤ

南部　喜久子

月花のあはれおほかる春の夜は
　門の戸さゝでともぞまたるゝ

月花ハツヾクルトキハ、大方は秋の月をサシテ云例ナレバ、少シ如何アランカ、サレバ、上ノ句ハ、花咲て月のあはれに霞むよハナド改メ玉フ方、穏カニ侍ンカ

水野　忠敬

あつさゆみはるにひかれてくる友に
　矢よりもはやく待ぞわびしき

四ノ句穏カナラヌガ上ニ、夜ノ意モ見エ侍ラズカシテハ

津輕　承昭

見せはやとおもふさくらに朧月
　かゝる夜頃は友ぞ待るゝ

教梯抄（十二）

夫木集雜

六帖題馬　民部卿爲家

みちのくの牧のあらこま身のほどに
　のりゐぬものはこゝろ也けり

同　同　權僧正公朝

世のなかは北のおきなのうまなれや
　よきもあしきも果をしらねど

同　同　百首歌の中に　藤原爲顯

花を見るみちのほとりのふるきつね
　かりの色にやひとまよふらむ

同　同　十題百首歌の中　後京極攝政

おどろかぬふす猪のとこのねふり哉
さらでも夢にすぐるうき世を

家集

十題百首歌の中に　　權中納言　定家

うきて世をふる尾ののきに住む蜂の
さすかになれぬいとふ物から

おのつからうち見る書もつき日經て
わくればしみの住かとそなる

夫木集雜　　寂蓮法師

牛の子にふまるなにはのかたつふり
つのあれどて身をな頼みそ

同　同

六帖題鯉　　知家

世のなかは淀のいけすのつなぎこひ
みをこゝろにも任せやはする

同　同

帝範の心をよみ侍りける審官
篇を　　前參議　公敦

をさむべきこゝろ一つをえらひても
もゝのつかさの道もわきける

同　同

文永六年白河殿七百首の歌の
中に披書知昔

後嵯峨院御製

むかしへやいかなる繩を結びおきて
今もその世のことを知るらむ

新續古今集雜下

屈原　　二品法親王覺譽

つゆしもになへて色つくあきやまの
ふもとの松ぞひとりさめたる

夫木集雜

六帖題文　　民部卿　爲家

うたてなぞやまとにはあらぬ唐文の

跡をまなびぬ身となりにけむ

同　同

正治二年百首歌の中に鼓

土御門内大臣

きみが代はいさめのつゞみ鳥なれて
かぜさへ枝をならさゞりけり

同　同

六帖題鏡

衣笠内大臣

幾たびもこゝろをみがけますかゞみ
うらには影のうつるものかは

雜下　（九十一首）

古今集雜下

山のほうしのもとへつかはしける

凡河内みつね

世をすてゝやまに入る人やまにても
なほうき時はいつち行くらむ

（未完）

飛鳥井家和歌の法式（三）

按察使源僖量

和歌披講譜

飛鳥井家　初甲

冷泉家　初乙

きみか代は千代にやちよに
さゝれ石のいはほとなりて
こけのむすまで

きみか代は千代にやちよに
さゝれいしのいはほとなりて
こけのむすまて

むめのはなそれとも見えす
ひさかたのあまきるゆきの
なへくふれゝは

うめのはなそれとも見えす
ひさかたのあまきるゆきの
なへてふれゝは

披講の調子は、其の時の、調子よきなりと二樂軒も雅俊も仰られしなり。

飛鳥井家和歌の式法終

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

飛鳥井家の式

一短冊かきやう、上の文字を書て、筆を染め、又、下の七字にて、筆を染る也。但、餘り、墨くろくならさるやうに、筆を可染也。名乘にて、又、筆を染る也。

一題のある短冊は、上の句、下の句の字頭を、同樣にそろへ書べきなり。

一無題短ざくをば、下の句の字頭 、一字程さげて可書也。

一女房の短ざくは、題有とも、下の句の字頭をさげて書也。もとより無題は、下の句さくる事勿論なり。

一短冊、長さは、不定、廣さは、一寸八歩也。長過たるは不宜也。

一短冊の折やう、題ばかり、書たるも、歌をかきたるも、短ざくの字頭を下へなるやう、三つに折也。

一たんざくを重ねて詠やう、題のよせのごとくかさねて、其の後卷頭をよみ初め次第〳〵に、上を詠みては、下へかさねすれば、よみあげてもとのごとくなる也。

一題もなくて、短ざくを上の句、下の句の字頭をおなじとほりにかく事あり。古歌などの、昔、題の有たる歌などを書にはくるしからず、また、題の有べき事を、歌によむに、題をばかゝずして、歌ばかり讀入たるは、字頭を、おなしとほりに書てもくるしからず。

一短冊乃をば、繼歌と云ふなり。懷紙を、さやうに唱ひそこなふべからず。

一當座の、短冊取やうの事、上座の中程に硯筥のふたながら置くべし。それを給りに參りて、左の手にて、短冊を取、右の手へ取りわたし、則、懷中して可罷立也。

一歌出來して、短冊、持參の時は、懷中して參り、硯

筥の蓋のそばにて、取出し、右の手にて置べきなり。

一當座短冊の詠草は、紙を折りて、題を書、名乘をよせて、能ほどに書て、歌をば、二行七字に可書、歌數、出でたらば、紙裏まで可書也。不苦。

一題書たる短冊を、硯のふたに置事、二並に揃ても置也。又、取ちらしても置也。人數、少き時は、ちらしても置べし。

一短ざくとぢぬ先に讀て、其の後閉べし。とぢやうは、上の端を、四分はかりおきて、水引、細くば、二筋、ふとくば一筋にてもとつべし。水引の赤きかたを、表へなしてとつべし。結びめ、短冊の間、指、三ふせ置て結ぶべし。水引のはしの、餘りは、能ほどに結び合すべし。水引のはしをかへすべからず、引とはしてむすぶべし。

一短冊とりて、たんざくの軸のうらに、年號月日當座とかくべし。

一短題はとり次第なれば、題のよせ書をして、そのよせの如く、短冊かさぬべし。ゑかれむ短冊御重やうは、上下あらざるなり。卷をば、先可定、卷軸は、不定ば、其の內に、祝言の題を、軸にすべし。

一夢想の歌詠事、三十一字を歌の頭に、一字宛置きて、可詠題をば、四季に戀雜を出すべし。題の方平にも、夢想の歌字を、一字づゝ、短ざくに書付けて出すべし。

一神前社頭にて、當座の事、短冊の裏に年號月日を書て、其の下に二行に天神法樂と書て、又、其の下に當座と可書。たとへぞ、

元和二年

九月十三日　天神法樂　當座（如斯なるべし）

一懷紙持出やうの事、懷紙をたゝめ、左の袖に入て、扨、座敷へ出る時、取出して、少し端をみるやうにして、左の手に持ちて出すべし。字頭を先へして、持ちて出し文臺に置時、取直して、座上の、本尊のかたへ、字の下に成やうに、右の手に取わたし置て退

くべし。道などに、貴人などおはしまさば、常のごとく、禮して通る、下郎、次第に先へ出づる上の人は、銘に可書なり。

一詠草書樣の事、兼題を、立紙に書べし。先、題を書きて、名乘ばかりを、題より、外へ出し、能比見合に書歌をは、二行に書べし。二首三首の題、歌の書やういつれとも、同然なり。是は、懷紙、一首の題の歌ならで、三行、三字、二首の題の歌をば、二行七字に書べし。但、飛鳥井家ばかり、三行五字、二行五字に書くなり。

一二首、懷紙の事、初の題をば、一首の時のごとくに、端作に書入れて、後の題を、常のごとく書ともあり、詠二首と、端作に有つて、題を、三首の時のことくにもしたゝむるよし。二首よりは、二行七字に成すべし。

一五首、懷紙の事、二枚繼にて書なり。三首めの歌を、おくの紙に二行に書かげねは、懷紙のおくあき過るなり、らいしのかつみう歌、一首ほど書ほどあまりたるがよし。七首も、二枚なり。それは餘るべからず。十首は、三枚繼なり。十首まで、二行七字なり、十五首より、二行に書なり。紙數さだまらず、書次第なり。懷紙の堅の長さ、一尺二寸より內にすべし。壹尺二寸より、外へ出すべからず。横不足なり。是は、武家の懷紙なり。

一女房、懷紙書やう季書をも、題をも、ぬしが名もかかぬものなり。歌ばかりをちらし書にすべし。

一當座は懷紙と云事はなけれども、又、働にする事もあり。一首、二首、三首同前なり。

一大人貴人は、季書をすべからず。出家もせぬなり。

冬日同詠三首和歌（此間不定）

前甲斐守藤原綱景（名乘字歟と云字よりさのみさげて不可書）

寄道祝

四字題端作書樣の事

春日詠海邊

早春和歌

四字題書、如斯なり。五字題の時、下つまりたらば、題の字を三字、和歌の上へわけて、書くも不苦なり。

二首の題の時、前の一首を端作に書入樣の事

冬日同詠時雨和歌

如斯、書て、其の題の歌を書、その次に、今、一首の題を常のごとく書なり。又、其の題の歌を書へし。三首の懷紙も如此なり。同の字の心は、惣の題と同と云心なり。又、惣の人に同しと云心も有なり。

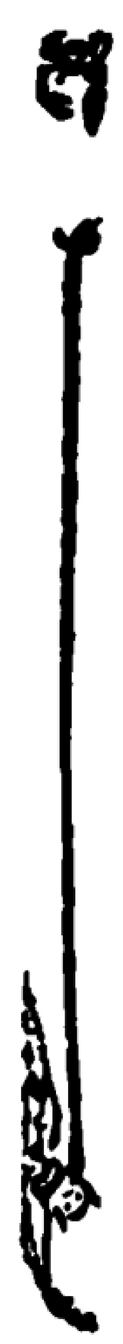
社頭にて會の事

春日侍　社壇詠三首和歌
佳吉

佛前にては

秋夜遊　平等寺佛閣詠三首和歌

如斯したゝめるなり。歌の書樣、前に仝じ。



歌俳百人撰（四）

故海壽翁
安藤冠里公

第十九

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

是は、先年、御老中被遊し安藤對馬守信友公の御事なり。前にあらはせし、吉川維定の歌と同じ心の發句なり。是も、淵明が詞をふまへて云しなり。雪は、夥しく降りしきる朝、寒風、劍のごとく、肌をとをしたるに、すあしにて、尻からげ、ふるへ聲して、御用はなきやと呼わりくを、御駕の內より御覽じて、あれも人の子なるべし。親の元に居るならば、巨燵にもあたりて居もせんに、奉公人のあわれさは、夜の內より起され、雪中にもいとはず、呼び步む、不便さよと、御憐の句なり。又、淺草御藏前にて、にし島といふ人あり。夫婦ながら、俳諧を好めり。西しま、ある夜、いたく、雪降しに、嘯夕といふもの丶方へ、はい諧あり

しまゝ、小鬪市をつれて行んとせしに、止り發句せし。

　わが子なら供にもつれし夜の雪

といへり。是は、冠里公のうたなり。夫より、西島、調市をつれず、一人出行しとなり。感情なる句なり。そも、冠里公は、御大名のうちにて、名高き俳人なり。綵枝葉集にも、御句見へたり。吉宗公、仰にて、暑氣、甚敷時は、生とうふを、生醤油にて食し給ふ事御好なり。對州公、是を聞て、御前へ出、君には、暑氣強きおりからは、生の豆腐を召上らせ給ふ由、甚、よろしからぬ事により、惣じて、五穀にても、魚、野菜の類、生にて上らせ給ふは、御大切の御身には無き事にて候はん。蕭にして、御上り被遊べし。生なるものは、毒氣殘り候。とうふの生なるに、醤油を付てたべ候を、下下にては、奴豆腐と名付け、殊の外、いやしき品に申候。決して、御無用に被遊べしとまをしあぐければ、吉宗公、仰に、其の方が申所尤なり。此の以後は食すまじ。豆腐にておもひ出せり。其方は俳諧のそく吟上手なりと聞く、今の、豆腐の題にて、即吟に、一句せよとの上意、取敢へず。對馬守

　雪の日の紅葉は白し瀧田山

と申されけれど、君、御機嫌にて、豆腐を題して、白き紅葉とは面白し、しかし、雪の降頃は、もみぢも散りて、有まじとあれば、對馬守打笑ひ、紅葉、末秋より、初冬のすへにかゝり候へば、雪を結び候ても不苦也。定家も、

　ちり殘る紅葉に雪もふりはへて
　　其の紅ひもいつかしろ妙

と御座候と申上ぐる折柄、御側に手白とゝへる狆、食物にやわたりけむ。夥しく、反吐しければ、君、對馬守を困らせんと思召し、反吐といふ題を被下、一句なきやと有しとき

　狼の反吐憐なり九十九髮

とありければ、君かんじ給ひ、殊に、其の方は、即妙なりと、仰わり。此の九十九髮の句は、小手卷に入たり。

第二十　梟は花のうき世を晝寢かな　　黒池堂尾海

鳥類は、晝、眼明に、夜は目のみへざるか生得なり。其の中に、梟は、晝は、少しも、見へざるゆへ、木の繁みに隠れ居る。世の中の色香も知らず、漸く日暮て、眼明に飛行と、夜の事なれば、世上は、皆、靜まり、何の氣色もなし、食物も、こゝろにまかせず。漸々寐鳥などを取くろうのみにして、夜が明れば、又盲目のことく、飛行もならず、人を恐れて、木の下暗に隠れて、一生を送る、是、人界にも如斯の有様、多あり。過し、寶曆十二年の夏、私用にて、木曾路にかゝり、上ケ松といふ宿より、一里半程北、曲宮といふ所に泊りしに、蚊は一疋もなし。余いふ、江戸ならば、蚊帳を釣のなんのと、世話多しと云しに、宿の亭主と見へて、六十余の男、其の蚊帳と申物は、いかよふの道具、どの樣なる形にて候や、是まで見ずといふ。江戸と申所も承り候へども、用事なければ行かずといふ。又、翌朝出立前、飯をしたゝめる時、余、持參せし淺草海苔を取出し、燒て、汁に入しを、あるじ見て、それは、何にて候やと尋ぬるに、是は海苔也と申せしかど、未、合點ゆかずと見へて、當地にて、のりと申は、行燈、障子など張り候せつは遣ひ候と申ゆへ、其の糊にてはなし。是は海より出で、ひつきやういへは、海の潮のあかにて候也といへど、先、此の畢竟と云ふ詞が、また、通せずと見へて、余が顏を詠め居たり。その宿を立折から、海苔一枚を遣しけれど、殊の外よろこひ、少しつゝちぎりて、隣家へも、配遣しければ、悦び吹聴す。予おもふに、此の主は鳥類と、人と替れと、此の發句の梟と同然の境界なり。娑婆に生れたる斗といふ、人と名の付たる斗とおもへと、夫にても、一生、是にても一生なり。同し人間に生れ得ても、生れ所があしきゆへ、井中の蛙同前にして。其の儘にて朽果つるよどおもへども、左にもあらず、昔より名僧智識は、へん鄙の生なれども、宗匠となり給ひしも有り、是を以て

見れば、心からこそみはいやしけれど、古歌にも有り、田夫野人にも至孝の者もあり、博學の倅に不孝もあり。水は方圓の器に隨へり。其の身の生得、てんでの耳たぶ次第、米くらの鼠は、常に、米を喰ひ、溝に住む鼠は、どぶどろを喰ふ類なり。或年、余遠州秋葉山より、三しゆう風來寺へ、山越に行しに、九馬石打といふ所には豆腐やうの物さへなし。外國の如し。億兆の人の內には、秀才のもの有べきに、生れたる、其の儘にて、朽果る社殘念なれ。深山に生立し、梅櫻は人にもしられず、散りはてゝ、上野飛鳥の花は、諸人に愛せらる。花はおなじけれども、其の木〳〵の天命なり。同じ竹にても簾、花いけ、あるひは、扇子骨と成りては、上ッ方の御手にふれ、皮草履のはなを通し、田樂ぐしと成ては、下〳〵の取わつかい、桐も其の如く、佛体と刻れ、又たは、琴となりては、高位の愛し給ふ也。下駄となりては椽の下に住居、世の中みな同し物にて、尊卑と別るゝ所かくのごとく、天より、是は琴にせよとにもあらず。是は下駄にせよとの御差圖もなく、地より、是は簾にせよ、はなを通しにせよとのゑこひゐきして、生しさせ給ふにもあらず、古歌に

　いさ手折人中みせん山さくら

と云ひしも、前にいひし如く、山中の櫻は、市中の人見ず、人も、其の如く、親は、子を、手元をはなす事をかなしみ、子は親の手許を出づるをきらひ、來年は、奉公に出さん、來月は、手放さんとおもふうち、一日一日と、我が側に置たがり、牛墳とて、牛が子をぬぶり廻す樣に愛する故、いつしか成人して、最早、奉公は遲し、いつ迄も、あの樣にしても置れまじ、男なら聟に遣るとも、嫁を取るとも、女子ならば、聟をとり、嫁にやるかの二ッなれど、先へ遣はしたる所が、人中を見ぬものなれど、人の應對も、付合も、疊障り迄、水際の立そかし。さながら、是もいろいろにて、いちがいにはいわれず。余かしれる所の娘、誠に懷子にて、他は少しも見ざりしが、聟を呼入し所、殊の外夫を重

んじ、兩親を尊び、人あひそふ能く、付合も叮嚀にて、人をそらさねど、出入も、段々繁く、末は富家となり、誠に受くる草木の、をのがさまざまにて、持ちて生れた果報あり。置て生れた因果あり。智者愚者得失は述べがたし。一生、晝寝してくらす梟になり、からすになぶられぬやうに有りたし。

第二十一

子は親の心盡しを忘らぬ火の
てき行舟の迷ひぬるかな　　黒田筑前守繼高卿

此の歌は、御領分筑紫の不知火、讀かなへたる、御歌なり。むかし、景行天皇御舟にて筑紫の沖へ、御通船の夜、御舟を守護しいつともなく、前後、火燃出で、御舟を照しけるとかや、則、是忘らぬ火をいはんとてつくしの枕言葉あり、火の前に見へし國を、火の前と名付、火の後なるを、火後ととなふるよし、風土記に見へたり。後に肥前肥後と改めたり。人の親の心を忘らぬ火といひかけたるは、俗語にも、親の心、子知らずともいへり。景行天皇の海上に、迷ひ給ひし時、忘らぬ火現して、御導せしごとく、親の心は子の身の上を、露もわするゝ事なく、成長する程、能、みちみちとおしへれ共、あやまちて、あしき道に入こそ淺ましき事なり。黄門公の御名歌に、子程に、親をおもへと仰られし、我子を愛するほど、親をいつくしみなば、何かあらむ、子を持て、親の恩を知るといふ事あり。むかしより、世間にていへど、是は正しからぬ。詞ぞかし。子をもたぬものは、親の恩を知るまじきや、子をもたずとも恩は知るべきなり。世の中に、あるならひ、子を持ぬものも、あまたあれども、親に孝を盡すもあり。子を、あまた持ても、不孝なるものも有り、子は、親の心を知らぬ火といひし、上の句、誠に、人も、十九、廿位までは、闇夜に舟の迷ふがごとく、こゝを、いつくと辨へがたきに、親の慈悲心の忘らぬ火、光り輝しごとく、少しもはやく、をやの恩をしり、親の心を休よとの孝行、御詠歌なり。

第二十二

名月や鹿の心は戀の闇　　神田樓川

是は、柳原土手下に、富田樣御やしき前に、久しく住居せられたる宗匠にて、最早八十歳斗の、尤老宗匠なり。此の人の句、すべて、感情多し。名月は、世上にて、月の明なるを賞翫し、二千里の外までも、隈なくともてはやし、唐土日本ともに、夫々の樂みあり。あるひは祝事、あるひは酒肴を出したはむれ、踊り、樂しめども、其の中に苦みある時は、或は困窮の人などは、是は、如何せん、此の事はどふ成事ぞと、むねせまり、たはむれも、耳にもいらず、酒を呑でも、熱鐵を呑む心地にて、我面白の人、かしましとやらん月の明なるに、心のくらきをよみあわせたる句なり。

第二十三

みな人は神の誓を白露の　　東叡山　寒松院
かわける袖のうたで世の中

此の歌は、東ゑひ山御宮別當、寒松院、四月十七日權現樣、御宮え參詣して、誠に、宮殿にひれふし、東照宮の有が如し、千辛萬苦の功積り給ひ、御骨を砕かせ給ひ、天下安泰の功を立給ふは、御壹人の御爲にもあらず、御孫子の榮花を思召にもあらず、唯一天四海萬民の塗炭の苦みをすくひ給はんとの御仁惠の甚しき、これ神佛の至誠と申べし。深草の元政が歌に

誰爲に碎きし骨のなごりぞと
おもへど袖に玉ぞちりぬる

と讀しも、同じ樣にて誰が爲に、家康公、御骨を碎き給ひしと云へる所なり。當時の人のこゝろ付かざる情なしと、世をかこち涙にくれて、今の人を恨みかこちたる歌也。御宮別當の本姓に、能く叶ひありがたき、心なり。皆、せけんの人、神の誓を白露といひかけし、東照宮の御意を志らぬは、余り情なし、萬民貴賤ともに、如此、目出度御代に妻子眷屬、無事安體にすごして、衣食住の整といふは、誰が、御蔭ぞと、世間の人をとがめし、御手仁葉なり。露泪のかわける人ぞ、

うたてけれ、東照宮の御恩を忘きやくせし人の心を詰
度引立んとする教誡、いとありがたし、此の人は、茶
を好みて、御大名方、御旗本にも、度々出會なり。ま
た、下賤のものへも、貧家へも、ひたと立入し事、こ
れも知るに交る神心にておもしろし。

第二十四

　草市やゆふべまで聞風の音　　　淺草乾升

草市は、七月十二日三日にして、初秋の季也。きのふま
で、野邊に、千草の色々は咲亂れし精靈棚に餝るとて、
殘らずかり取、夕迄風の音せしも、けふは跡方もなし、
人のいのちも、左の如く、きのふまで馴なじみし人も、
頓死頓病し、一夜の内に無き人の數に入る世の習ひ、
夕べ迄、聞とは面白し、御和讃にも、きのふ見し人、け
ふは、早夢と成行はかなさよとうとふなり。

第二十五　　　　　　　　　　徳川右衞門督宗武卿

　桃さくら見るに心は慰まで
　　みとせを過す君ぞ戀しき

是は、田安樣の御詠歌。其の仔細は、大御所吉宗公、御
在世の時、御謂き被遊て、宗武公へ進せらせたり。是
則、もゝさくらの御繪なり。殊の外、御大切に被遊、
父君の御筐なれば、いとゞ、御涙の媒となりしに、吉
宗公、御他界より三年目に相當り、或時、右の御繪を
御取出し被遊、御細見、さも美しき桃さくらの御繪を
御覧じて、御心慰し事、更になく、却て、吉宗公御
在世の事とも思召出され、御戀志たひ情をうつさせ
給ひての御歌なり。實に、もゝさくらの若ばへも、三年
立て、花咲くものなれど、御三年忌によせて、讀給ふ、
誠に御秀逸たるべし。此の御歌を見て、戀歌らしきと
いふ人あれど、大きに見所違ふなり。見るに、心は慰
までと、此の御手仁葉ぞ、心をつくべし。　（未完）

閑雲流水

白松園主人

なれては、他鄕もなつかしくて、今はとなれど、さすがに、うしろ髮ひかるゝ心地のするは、人の情なりけり。破れぬとも、慣衣はすてがたきものなるを、ましてうき月日を、心のどけく送らせつる所よとおもへば、夕風と風鈴の音とにおくられて、川のべに涼み行く人のうしろかげも、撞きならす、晨の鐘に、晴れ行く、雲霧の中よりあらはるゝ岡の老松、朝風に、涼しく鳴き出てたる蟬の聲、新聞賣る聲、豆腐の笛、さては按摩、うどんを流しあるく調子まで、耳底に殘らざるはなく、日頃、親しき友垣の事などは、云はずもがな。きのふはふるさと戀しとて、懷土望鄕に堪へざりしも、けふは、人の國離れ難しといふ、習慣は、歷史を作る者なる事、是に至りて爭ふべからず。滊車の便は、日に百里を行けども、別れとなれど、暫しにてもいとつらし、理を枉げても、かくなさむやとてなんよめる、

都をぞ我がふるさとに故郷を
　みやこになして住むよしもがな

ふみ月廿二日の夕つ方より、一人の友と共に都を出でたちぬ。朝のほどより、雨もよほしがほなりし雲の、ふき拂ふ風のなけれど、立ちも去らで、暑さ、いみじかりしに、今しも降り出でゝ、いぶせき限りなし、臆を濕はしける涙を、まだ足らずとにやあらむ、滊車に乘れど、矢庭に品川大森と打すぎ行く、左手は、海波淼々として、顧みれば、都はかげだに見えず、吐き立つる、滊車の烟のみ、細く、長くぞ殘りたる、往にし年なき兄が、歸鄕の春と題して

くろけぶり旅のかたみと殘しおきて
　今はとむかふふるさとのそら

とよみしなど、思ひ出でられていと悲し。

雁ならぬ我身はいつの秋にしも
　またれて君にあはんとすらん

春霞かすみていにし雁ならば
　またれん秋もあらましものを

とは、同じころ兄が、ふるさとの友によみて遣しける歌なり。車中のつれ〴〵なるまゝに、けふの我身にくらべて、いとゞ袖をぬらしぬ。五十ばかりなる、嫗、仝車してありけるが、近江の國より、はる〴〵、我子の、教導團にあるに、會ひに往きけるなりと語る、親のこゝろ、皆、かばかりなるらむ、夜もすがら、車に搖られて、明けの日の午後、京都に着きぬ。京都は、まだ、始めてなれば、少し遊覽せばやと留りぬ。折から、祇園祭なりければ、市中のにぎはひいふばかりなし。

　鴨河の夕涼

名を聞くさへ、涼しげなる心地ぞするに、石を嚙む水音を座下に聞く涼み臺、いかばかりの心地すらむ。古代風なる挑灯、あまたともし連ねて、酒くみたるなど、をかしさいはん方もなきに、東山の月、やをら嶺をはなれて、研ぎすましたる鏡のごと、赫き出でたるめでたさは、例へんに物もなく、をりから、粧を凝したる京美人の、月に對へるさま、心にくきこと限りなし。かゝる時にしも、玄瑞久坂氏の美聲を借りて、朗吟、一番せむ、いかに、今宵の興をや添へむとくちをし。

　清水寺、知恩院

露のひぬまに、苔の細路の草ふみはけて、詣うでぬ。音羽の瀧は、音に聞きしばかりはなけれど、塔堂の宏大、土地の幽邃、閑雅なること、聞きしには、遙にたちまさりて、眺望の絶勝、筆も、言も及び難し。まことにかくてあらば、斧の柄も打ちて、更に千代も經ぬべき思ひ、亦、他に比ひあるべうもあらず。傑僧月照の碑などありて、何とかや、和歌を記されたれど覺えず。知恩院をもとぶらひぬ、建築の宏大、寶物の、夥しきなど、書きも盡くされねど、土地の景は、清水の脱俗なるに及ばず、

　高臺寺

今は、廢寺の如くになりつれども、又、一つの仙境な

り。そのかみ小堀遠州侯が、點茶の料に物しつるなりとぞ、鷲峯山、白山の二山を、自然の築山と見て、鶴龜の池、及び、蟠龍の池をものし、舞子の濱松を移し植ゑなど、廊は、曲ねりて高く、築山の下に至り、泉水の音、耳底を洗ひ、松風の響き、心を澄まして、かゝる處に、讀書文筆を友としたらましかばとれもひぬ。門を入る處に、幹老いで、枝四方に榮えたる櫻樹あり。姥櫻と名く、後陽成院の御下賜なりとぞ、加茂季鷹翁、嘗て、之に詣うで、

兒大事そだてあげたる姥櫻
花は年々ころ〳〵に咲く

の狂歌を詠せりと覺えたるは、ひが耳か。

南禪寺

先年、火災に會ひて、宏大の建築、今は見るかげもなけれど、かねて瀧のあなれば、暑さをやらんがために、あへぎ〳〵、奥、深く尋ね入りぬ。老にけらしな、黑きすぢもなき瀧水の、玉をこきちらすが如くに飛びかゝる狹霧、近く、床几を据ゑて、れ茶召せと愛敬づける女、利益に拔目なき世の、かゝる處にさへものしぬるは、物多の幸と、腰うちかくるに、年若き女ばら數、多く、なきめき來りぬ。瀧にうたれたまへとそゝめかせど、入らんとする人もなきに、一人の田舍翁つと入りて、いと心地よしと罵りて上りたる、いとむくつけし。

金閣寺、等持院

外國にまで、借金して、驕奢を極めし、義滿が、遺物として、名高き金閣寺、三層の樓閣を、金の延板に埋めて、金色粲然たりけん當時の樣は、今も想像するに餘りあり、池築山などのめでたきはいはずもがな。等持院は、奸賊尊氏を埋めたる寺なり、足利十五代の像を安置せり。徳川氏以來、屢々、勤王家に鞭うたれ、或は首をひき拔れたれども、今はもとの如くにつぎてあり、寺内の景は、遠く、金閣寺に及ばず。

歩を轉じて、仁和寺、妙心寺に詣うで、又、更に滊車

に投じて、嵐山へと赴きぬ。渡月橋のわたりより、小舟に掉して、嵐山の麓を泝る、春ならねど、花もなく、秋ならねど紅葉もなけれど、山の勢おもしろくなつかし、友はとりあへず

わけ入りしかひはありけり嵐山
花はなけれど紅葉なけれど

川は、大堰川にて、上流は桂川、保津川などゝなれり、香川景樹大人の歌に

大堰川流るゝ水にかげ見えて
ことしもさけり山ざくら花

とあるは、このわたりなるべし、二町ばかりのぼれど、温泉ありて、旅客、賑へり、その上に千光寺あり、大悲閣といふ、いと高き處にあり。芭蕉翁の句に

花の山二町のぼれど大悲閣

慶長年中、大堰、高瀬、天龍、富士、の四大川を鑿して、公供事業に竭したる、角倉了以を祭れり、眺望絶佳にして、遙に京都市を望むを得べし、實に塵外の靈境なれど、あそぶ者常に絶えず、低徊去るに忍びぬうちに、日も、稍、沈みぬれば、山僧に辭して、山を降り、次でなれど、小督局の墳をも訪ひぬ、苔蒸し、卒塔婆朽ちて、之や平安宮、第一の美人が、跡を埋めし、嵯峨野の末かと、いたましく、彼の明月に鞭を揚げ、西をさしてぞ歩ませけん仲國が、峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音かと、聞きなさるゝ處もなく、團子賣る翁が訛聲のみ高し。

とかくするうちに、廿七日ともなりぬ、京都の名所も、おほかたはめぐりをへたれどとて、うちたちて、その日の正午に神戸に着きぬ。滊車乘り替ゆる暫しのひまに、湊川神社に詣うでぬ、荊棘、途を杜ぎて、茫々たり草むらのうちに、嗚呼忠臣楠子之墓てふ、一小碑も、今かく美々しく齋かれ給はんとは、西山公の志、今に至りていやちこなり。やがて滊車は出でぬ、午後四時岡山へ着きぬ、友の家に投じぬ。次ぎの日、池田侯のものせられし後樂園、及び、亞公園の七重塔など見

歩きて、明けの朝、友に別れて、只、一人、再び、汽車に投じて、漸、ふるさとに歸りつきぬ。くすぶる蚊遣火いぶせくて、蓬が宿にうちわびぬる者から、今は閑鷗野鶴の身、青山白水の間におきふしするごとなりぬれど、都の塵も、旅の疲れも、拂ひやりぬる心地ぞするや。

（完）

禽獸の言行

田端の隱居

あはれむべし。鴻鵠の心を知らぬ燕雀あり。明日は、必ず、とく起きん。とく起きて、彼をなさん。など丶て、用事を數へつゝ、さて明朝になりて、とく起きんともせず、用をもなさゞる、之を梟の宵工と云ふ。

むかし、竹千代君に、尾州熱田の町人、黒鶫といへる小鳥をさしとげたり。此の鳥は、よく囀る鳥にて、殊に諸鳥をはじめ、もの丶まねをする鳥なりけれど、御近習のもの等は、老いも、若きもみな、この聲を聞き、感じおもしろがれり。竹千代君、之を聞こしめして、之は、いとめづらしき小鳥、殊におもしろく、か丶るものをおくられたる、まんぞくの至りなれど、此の鳥は、まづ、汝に返さんほどに、もち歸れとの御意ありたり。さて町人、その鳥をもち歸りたるあとにて、近習のもの、如何なれど、君には、か丶るめづらしき鳥、たま〳〵送りとせしを、すぐに、御返しなされ候やと、いぶかしみ問ひけるに、かの鳥はよくもろ〳〵のまねをなす、かの鳥は、多分おのれが音は、しかるまじきぞ、人も、器用なるものは、大方、大なる智はなきものぞ、かやうに、おのれが、智慮なきものは、大將たるものは、もて遊むぬものぞと仰せられにきとぞ。それにつき、よく〳〵、糺しき丶しに、黒鶫、はたして、己が音はなき鳥なりとぞ。さては、おのれが意見なく、誰にても、かれにても、まねびにせる人、黒鶫と云はんか、又、己れが、力をもはからず、鶫のまねをする

鳥の如き人あり。

張合（十）

白魚女史

マー、モー子なきにしかず。子なきにしかず。子などもつべきものではない。浪男、妻を娶らぬと云ふは、よき思案、子を持て知る親の恩と云ふが、親の恩どかりではない、子を持て、子をもつべからざるものと覺た、アー、文代も、何をなしをるならん。歎ふれど、もはや廿歳に近し。まさかに、我につげで、結婚もなすまじけれど、彼れも獨身で、世を終るつもりならん。二人とも、よき分別、子を持つて憂をもつまじとの分別と見ゆる。子は、實に親にまさりたるもの、己は、おろかであつたとの長嘆息を、浪男に聞えよかしに、いつも、妻に向つてもらす浪男の父、良人、マー、さやうにお煩ひ遊ばさで、それに、われも、また、さどかりおろかでもありますまいし、其の内には、思案もしかへるでしやうと、妻のなだめ言葉を、じれつたげに半ばにうちけして、思案をしかへる、十九、廿歳の身ではあるまひし、もはや三十歳、今が、分別ざかりではないか、流石は分別ざかりなればこそ、子をもつまじとの、よき分別をつけしにはあらずや、此の上に何を思ひかへる事があるぞとて、又も浪男に聞えよかしに、妻を叱りつくれば、妻はなほやさしく、ほゝ笑みて、さやうに短氣にお叱り遊さで、浪男も、まさかにいつまで、女などを思ひ居りも致しますまひし、文代も、其の内には便りもありませやう、ほんに若きものは行きとゞかぬものとはゝと、くるしさを忍びて笑めど、何、文代は、便せぬが、己の望む所、流石は、兄の子だけありて、一すぢに業にすさみをるならん。業にすさみて、獨身に過すは、流石におもしろい、親にまさつた子は出來ぬものと云へど、劣つても、流石は兄の子だ、己に劣つた子は、のろ石にでもなるかおちであらふと



て、之も高聲に、浪男に聞えよかし。つねは、やさしかりし妻に、此の頃はむづかしき小言のみ、げん氣よかりし性も、此の頃は、たゞ額をしわめられてのみ、それも何故、浪男を、なみ〳〵ならず思ふよりの事、思へば、黒かりし髪の、にはかにしろくなられたるげ、彼方をなだめ、此方をすかす、母は、殊更人しれぬ心痛に、ならびをりしはも、いつしか、一つこぼれたり。浪男、父の心も、母の心も、深く察したり。戀せじとするみそぎ、うくる神もあらばと思ふは、なほ、迷ひのはれぬなるべし。

あはれ、實に決氣すべき事なり。大丈夫が、かくめゝしきは耻かしい、耻かしい限り、かねて大和男子の花をぞ咲かせんと思ひし心もうせんとしたり。我ながらはづかしかりきと決氣して、父の前に至り。今までの、女々しさをわびぬ。さて、只今より、やまとの國中をめぐりて、我が國の文の花を拾ひあつめんとぞんじ候此の義おゆるしをと云へど、何にも行け、何なりと勝手にせよと、なほ、額のしわをのばさず。あいなく答ふれど、一目見し眼に、浪男が、決氣のさまをさつと知りて、心にはよろこびゆるしながら、なほ後をいましめんため、さは、あいなく答へしなり。母は、旅行ときゝて、いとおぼつかなく思ひどゞむれど、うちすてれけ、意くぢなき子、のめらんと、ころぐんと勝手にさせれけど、良人に叱られて、旅の用意をとゝのふれど、不甲斐は歸りて快なく致すべしとて、浪男ひとり、いさみて旅だちぬ。奈良、大和、攝津、浪花、まづ、名所〳〵をへめぐり。古跡〳〵を尋ね、文の道をさぐり。ゆかり〳〵のやどをとひ、かしこき人の許には、尋ねわたりて、文話をきゝ、かた〴〵、折り〳〵の花もみぢを尋ねて、一心に、しきしまの花をあつめんと思ひぬ。其の年も、いつか、十二月のつごもり。昨日より、かけてふる雪の富士の裾野にとまりたり。折りしも、六十路に近き老翁の、十八九ぞかりなる處女ととまりあはせたるが、老翁は快活に、處女に向ひ、ふ

るは〳〵、花とふるは、月と光るは、露とかすむは、こや、娘、絶景〳〵、明日は元旦、筆はじめに、一つうつして、世の中を寒からしめやうではないかと云ふ聲、ふと浪男の耳にひゞき、思はずもかへり見て、奇異の人と思ひぬ。處女は、ほゝ笑みて、今宵は、富士のいたゞきに上ると同じ事、仆れるまでもうつし見ましとて、笑る目元、口元、よしともあしとも思はねど、浪男、何となく心にとまりたり。何れ畵師、畵がき、林愛仙の雪は、之にもまさりたるがと、又も、むかしの思ひを思ひ出して、一夜をねぶらずあかしぬ。

まだ消えぬ雪が、霞かと思ひし春も、いつか深みどり、霞か花か、みよし野のしら雲をふみ分けて、どうだ、娘と云ひしばかりに、たゝずむ翁、これは〳〵とばかり答へて、共にたゝずむ處女、はからずもふりかへり見るは、浪男、先きに富士の裾野にとまりし親子と見しより。不思議なるは、むねにうつる處女のかげ、今日は、つやさへそひて、女故に、今日まで、いたづらにつひやしたる光陰、思ふても不甲斐なり、よきにも、あしきも、女のかげはうつさじと、浪男は、そのまゝ花のまぎれにのりたり。

今年の花もおち、重ぬる月も、四つ五つ、今年は、中の秋、十日五日の月の中にも、一入のかげ、のう娘、三日月の頃よりまちし月にはあらずやと、例の翁の、快活に處女をふりかへれど、をばすての山には入らじと思ひしものをと答ふる、やさしき處女の聲、さては、亦かの翁、親子の聲と思はずもふりかへりて、浪男は、つく〳〵と、少女を守りたり。彼方も、此方を見て、翁のうしろに引き入りたり。浪男は、あやしくも、月の光りの雲に包まれたる心地せしが、深くも思はで、我れと、他うつれど、心はなほうつらず。かの口元、目元誰かに、誰かに、文代、文代、いな〳〵、文代など、かけても及ばず。立派さ、高尚さ、實に、何處となく高尚なりけりと思ひつゝ、歩をかへせば、いつか翁も、少女もあらず。文代は幾歳ぞ、もや十九歳、かの人も、十

八九、もしは、もしは、いな、娘々と翁の呼びなりぬ。文代には親はなし。されど、娘を娘と呼ぶや、中〳〵にをかし。もしは、師のかやうにむつび呼ぶにはあらずや、何となく聲もなど思へど、中〳〵にながめんとせし月は、他處に、たゞ、處女のかげのみをやどしぬ。ほんに、今宵はおれが、一生の中での月だ、十年ばかり前に、御身の父樣と黎藿を羹にして、くみし時もよかつたが、かやうにはすまざりしと、翁の聲さわやかに、月の光りとあらそひぬ。お前のお父樣、はて、翁は、火にはあらぬな、云ふ事もとて、彼方をうち直せど、月影に、又やてりかゞやきて、處女の顏、

花のかげに、月の光りに、おぼろに見しかげ、もはや、女のかげは、心にとゞめじと思ふ浪男が、目に耳にうつりて、花には、月には、その影思ひ出でぬ。

一年を經て、浪男、近きわたりの花もひろひあつめて、流石、故鄉の戀しく、父母のなつかしく歸り來りぬ。怒りし父も、向ふれど、母はなほさら、涙をまでうかめて、文代は如何にととへど、おとづれも、未だなきよし、浪男、思ひし人は、みな畫がき、したがつて、畫さへ、戀しくなりて、其の秋の共進會をまちて、行き見たり。中に富士の雪、をばすての月、吉野の花の三幅對、しかも、二くみ、美事、眼とまりて、見れど、林愛仙の三景よりは、又一入の心地、落款を見れど、たゞ、良雪女史とありたり。浪男のみか、否、會中、一をしめ、諸新聞にも好評を得、遂に、其の人の黑川勝の娘にて、勝もまさりたるもの、子も、また、すぐれたるよしをまであげられぬ。

後、浪男の父は、何處へか旅立ちぬ。半月ばかりありて、文代を伴ひ歸りぬ。げに良雪、雪より、いさぎよく、かゞやきぬ。浪男、昨日思ひし人よりもまさりて思へど、文代もまた、叔父叔母のすゝめを爭はず。高砂の浦、船の聲高く、千代に八千代にと結ばれぬ。貞松二本。

（をはり）

文林

山新樹　嵯峨實愛

ひえのねの一本すきも見えぬまで
青葉しけりぬ志賀の山こえ

朝梅雨　鍋島直大

閨の戸は降るさみたれに明かねて
朝のねさめのおそくもある哉

谷新樹　津輕承昭

はなの時とひしこすゑも一つにて
谷ふところは青はなりけり

夏沼　前田利鬯

水わかくさひたる沼もすゝしきは
ほたるの影をみるよなりけり

道臣命　宮地嚴夫

八咫烏みちひきすともきみなくは
うたのうかちに誰かいるへき

千代野尼　北郷久政

水桶のそこぬけざらはもちつきの
さやかなる名は殘らざらまし

避暑　植松有經

打つけに涼しくもあるか夏やまの
岩にくたくるたきのしらたま

夏月　加部嚴夫

打なひく軒のわかたけつゆちりて
ひかりすゝしき月をみるかな

夕郭公　鎌田正夫

足ひきのやまほとゝきすけふも又
くるゝそらより鳴いてにけり

樹陰水　岩崎勝従

山かけの木の下しみつなつくれは
むすびてゆかぬ人なかりけり

寄螢述懐　岡部讓

書よむとわつめざりしを悔むかな　ほたるあかりも光りなき身は

蟬聲涼　諏訪忠元

松風のたえま〳〵になくせみの　こゑのしくれて涼しかりける

國旗　足立正枝

昇る日のかたちうつせる日の本の　旗より上のはたあらめやも

寄鎧名所述懐　赤松景福

塵つもる櫃のよろひの馬手先の　めでもあらずてへむか我世は

西郷の像を見て　大畑弘國

世の中をそむきすてゝも月花に　そむかぬ路をはたどりけん

國旗　蜂須賀隨子

わか國のみはたにうつす朝日かけ　光りいたらぬくまなかりけり

芍薬　前田朗子

深みくさちりたるあとに咲いてゝ　ことに目にたつ芍薬のはな

石川丈山　柳原愛子

垂乳根のはゝのためにとこゝろにも　あらて憂世にしはしいでけん

夏夜雨　保科節子

端居してひとまつのきに一しきり　おとつれてけり夜はの村さめ

徳川光圀卿　小池道子

いすゝ川たえぬなかれの一すちを　さやかに見する水くきのあと

深山瀧　大谷章子

おくやまの梢のせみのこゑそへて　瀧のおとこそたかくきこゆれ

雨後新樹　坂田泰子

村さめのなごりの露のおちたゝりて
わかはの色のうるはしきかな
中牟田常子

船納涼

見るだにもあつさ忘るゝ水の上に
ふねをうかへて遊ふ夜半かな
原田蒼生子

大原女

いにしえの手ぶりなれはや大原女の
賤きわさもひなひさりけり
小川直子

山家首夏

卯のはなのはつかに匂ふわか山の
かきねゆかしみ夏のきぬらん



雜報

●神宮御用の御織物　今し、御造營中なる皇太神宮、御正殿は、明年八月頃、御竣成の筈にて、其の御裝飾に遊ばさるゝ、御正殿内部の御壁代、御戸張、御天井張、御蚊張等は孰れも、曲尺、一尺の目方十匁以上の生絹を用ひられ、又、御神寶の御袋覆ひに用ゐさせらるゝは、大和錦にて、其の御用費も少からずと、製造は、總て京都の織物師飯田新七氏に命せられ、牧野造神宮主事は、既に、右、工場、新築地を撿分したる由なり。

或人「さだまれる廿年の外に大宮作りせらる御よにもあるかな」と、いはれしもさる事ながら、先づ心ある人〻、伊勢の地にあそばれたらむはいかに。宮川の流にそへて、機どのてふ、苔むせる、石のしるべかきわり、見わたせば、麥、秀でゝせん〳〵たり。賤がふせや、二ッ三ッたちならびで、ゆきこう道もたえ〳〵に、鳴きすだく虫の音もいとあはれにて。うたゝ懐古の情にたへざるものあらん、嗚呼吾を、かく、悲しう思はするはたゞ、「五十鈴川たのむ心はかはらねと、などわたる瀬

のなほすぞむらむ」と、御詠あそばさるゝに至らしめ奉りしはたぞと、或は泪にむせび、或ははがみをする事もあり、こゝに御用の御織物と聞くに付て、かく有なむ。

●御眞影下賜　今般臺灣守備、各歩兵大隊に、御眞影御下賜在せられたりと承たまはりぬ。

●皇后陛下の御仁徳　陛下の民草をめぐまるゝに御心のふく、あつくまし／＼事は、申しあぐるもさらなれど、承はるごとに感しまつらぬ事ぞなき。過日も臺北縣巡査にして、土匪討伐の爲め、南港にて、右手腕に負傷したる竹内康政、大稲埕にて、有足大腿部に負傷したる菱刈竹彦、水尾庄にて、左足大腿部に負傷したる、日比久太郎の三名が、臺北病院にて治療を受け、其の負傷部を切斷したる由を聞し召され、畏くも、特別の御詮議を以て、義手義足を賜はる旨、香川皇后宮太夫より、其の向へ傳達されたり。あゝ／＼

●皇后陛下日光行啓　皇后陛下には、近々、日光離宮（目下東宮殿下行啓中なる田母澤新御用邸へ）行啓仰出さるべき御内議ありとはのかに承りぬ。

●皇太子殿下の御動靜　御避暑として、目下、日光田母澤の御用邸に御滯在中なる、皇太子殿下には、御登山以來、御機嫌、いとも麗はしく渡らせらるゝ趣にて、毎朝御乘馬の催しあり。定めの時刻には、各侍講を、講筵に召させられて、其の講義を聞し召され、武道の事は、之を侍從武官に御下問あらせられ、炎暑の折も、些か御倦怠の氣色あらせられし御事なく、近侍の人々は、孰も感激せざるはなしとぞ。

殿下には、田母澤御用邸に入らせられて以來、去る十日までに、三回、日光町内を御遊覽あそばされ、御服裝の如きも、いたく質素を旨とせられ、侍官の如きも簡略を主とせられて、僅かに、一兩名供奉するに過ぎざるのみならず、御徒歩にて、或時は荷馬車のある邊りを御遊覽あらせられ、或時は車夫の居る所などを御通過あらせられて、親しく下情を察せらるゝことあり。されば御警衛申上ぐべき警官など、漸く　殿下の御通

過あらせられしとを、其の後に知る如き時もありとなむ。

●故北白河宮御像拜受　　上野戰爭の際、故北白河宮殿下が、會津を指して落ちさせ給ひし時、船を常陸平潟灣に入れ、從者を從ひ給ひて、霽雲閣といへるに入らせられ、夫より陸路會津に向ひ給ひしは、皆人の知る處なるが、其の當時、平潟町御上陸の際の御摸樣は、緻密に畵かれて、油畵にものし、現に霽雲閣に掲げまつれるが茨城縣の前知事濟稜伯は、故殿下の令弟なるより、曩に、同地巡回の途次、右霽雲閣に立寄り、具さに、當時の情況を査察したるが、今回、其の筋より、霽雲閣へ、特に故殿下の御眞影、御下賜の恩命を賜はり、平潟町助役、鈴木秀輔、閣主鐵傳七等、右拜領の爲め、去三日出京、拜受の上、六日關本停車場に到着し、無事同閣に安置したりとぞ。

●仁德天皇舊址建標地決定　　夫の浪速高津宮御舊址調査の事に就き、菊地知事は、愈、去る九日午前十時より、元委員たりし、西村捨三氏、外數名と田村市長、平沼後藤兩助役、市參事會員、四區長、及、高津神社千五百年祭委員等を、堂島の官邸に招き協議の末、前委員會の決定と西村氏の提案とに據り、小橋なる味原池の北方字難波跡といふところと御殿谷とよぶ所の間の地、二十間四方を卜して、中央に、高七尺、幅五尺、厚三尺の自然石を建て、表面に「高津宮域」と題し、周圍には、石の瑞垣を繞らし、臺石は、長九尺、高四尺とし、標石の材料は、神武天皇御東征の折、草香江泊舟の御縁故に因り、府下中河内郡なる、今の日根市村大字日下山中より、古色ある天然石を選びて、用ゐる事に決したり。就ては、右建設事務所を高津神社内に設け、費額は、汎く府下の有志より募集せんとすると、其の委員を四區長、及、四區選出の市參事會員四名に囑託し、趣意書、豫算等印刷の上有志に頒つ事とせり。尤も石材運搬、其他、準備の爲、到底來月高津神社の祭典の間には合はざれど　來る十一月三日　天長節を

期して竣功せしめ、一大祭典を行ひ、府下各學校の生徒をして參拜せしめん豫定なりといふ。

●貞婦　陸前國渡邊彦藏の妻、セツ子、夫の癩病を看護すること十八年なりき。傍ら、老母に事へ、又、先妻の子を撫育し、其家庭、甚だ行きとゞきて、長するに及びて、海軍水兵たらしめ。且つ、ひとりでにて、一家をさゝへたるなど、よき行ありしかば、知縣金を賜ひ其孝貞を賞せりとなむ。

●醫士の篤志家　去る、十二日、横濱港の大火にて、慘狀を極めし事なるが、其のさ中に負傷せしものは、直ちに、最寄〱の醫師方へ、擔ぎ込み、皆懇なる治療を受けしが、中にも、水鳥警察醫の如きは、非常の盡力にて、根岸なる六角病院長、六角謙吉氏も、特に、自己の病院に於て、負傷者を施療したき旨、警察本部へ申込み、又府下赤坂病院のドクトル、ホートニー氏も、負傷者、施療の爲め、態々、横濱元居留地海岸六十番館に出張して、救療に從事したき旨、申込みしと云ふ。

●葉山村の二善行者の旌表式　本誌、第百八十五號に、この一人の事はいさゝか詳聞を得て報じたりしが、今、また、此に別報を得たれば、かゝげつ。美事善行の旌表は、其の風を善良にし、其の俗を敦厚ならしむるにいみじき力あり、一村風俗の良否は、之を大にしては、邦家の凡てにも及ぶ事なれば、其の路に當り。或は、其の上に立る人々は、いとも心すべきことになむ。神奈川縣三浦郡葉山村に、今尚、村長の職を勤むる伊藤春義氏は、明治二年より同村の名主役戸長職を歴奉して、町村制實施の際、村長に擧げられて、多年力を村治に致し心を、公益に盡し、其のいさを少からされば、去明治廿五年五月十四日、藍綬褒章を下賜せられ、爾來、益、精勵勤勉して、一日も怠りしこと無く、村民、深く、其の德に服せりといふ。又、同村字堀内なる鈴木じう子は、元一漁夫の妻なりしが、良人、病に罹

りし以來、十有餘年の永の月日、赤貧艱苦の間にありて、纖弱き女の身をも厭はず、貝藻を採り、他家に勞役れ、得る所の、些少なる賃錢もて、夫を奉養し、病苦を慰め、しかも、かゝる不幸の中に、能く子女を撫育し、夫、身亡りし後は、夢にも、浮きたること無く、みさを益高くして、能く業を勵み、家を治むる目出たき振舞は、皆人感歎に堪えざる程なれど、本年六月二十二日、同縣知事より褒狀に添へ、金圓を下賜せられたりとなん。されど村民等は大に、二氏の善行を喜び、今回相謀り、本月十五日をもて、同村、小學校に於て、盛に、旌表の式を擧ぐる由なるが、兼て、同地に別莊を有せる、子爵伊東祐亨氏、平田東助氏、德富一敬氏、男爵高崎正風氏のかた〳〵は、村民等の美擧を聞くや、これ　勅語の　聖旨にも近く、實に空前の美事なれど、豈に袖手傍觀すべけんや。大に贊助の實を表はし、力めて、其の式典を盛にし、所謂彰善癉惡の旨趣を貫き、十分に其效を奏せしむべしとて、其が主唱者となり、同感の人々より、應分の義金を募り、詩歌書畫類の寄送をも乞ふといふ(因に記す右義金は都合により首唱者なる右四氏の許へ送付するも差支へ無しとぞ)善行者褒章の寫しは左の如し。

神奈川縣相摸國三浦郡葉山村長
伊東春義

凛性懇篤事を處する圓滑明治二年名主役と爲り、尋で戸長職を奉じ、町村制實施の際本村長に擧られ、能く地方制度の主旨を體認し、專ら、自治の發達を圖り、道路改修に盡力し、多年公同の事務に、誠實勤勉し、其の勞効顯著なりとす。依て明治十四年十二月七日、勅定の藍綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰す。

奉　勅　賞勳局總裁正三位勳二等侯爵　西園寺公望　印

(以下署名略ス)

相摸國三浦郡葉山村
鈴木じう

資性温良、夫に事へて貞順、夫、病に罹り、家計益

貧困に陷るも、撓屈せす、貝藻を採取し、他家に勞役し、僅に、其の得る所を以て、藥餌を調へ、病苦を慰め、專心獨力家政を維持し、傍ら子女を撫育す、夫歿するの後、寡居業を務め、志行を變せざること十有二年、終始一日の如し、詢に奇特とす、仍て其爲賞金參圓下賜候事

明治卅二年六月二十二日

神川縣知事正四位勳二等　淺田德則

●第二回産婆開業試驗　東京府に於ては、來る九月、第二回産婆開業試驗を執行せらるゝ由にて、其の出願手續は八月卅一日迄なりとぞ。

●産婆試驗規則　産婆取締の勅令は、十月一日より、實施すべけれど、同令に附隨する試驗規則は内務省令を以て、兩三日中に發表さるゝ由、其要領を聞くに、試驗は學說と實地とに分ち、學說に落第したるものは、實地科の試驗を受くる能はざるは、醫術試驗と同一なり、學說科は、第一正規の姙婦、及び、胎兒の取締法、第二褥婦、及び、生兒の看護法、第三異狀ある姙婦、及び、胎兒に關する取締法、第四施術に關する消毒法等にて、實地試驗は、臨床産婆術なりと。尚は、試驗資格は、二名の醫師、及び、産婆若干名の修業證書を有するものに限る、及第の上は、各地方長官、之を産婆名簿に登錄するなりと云へり。

●私立學校令　勅令、第三百五十九號にて、私立學校令公布せらるゝもの左の如し。

私立學校令

第一條　私立學校は別段の規定ある場合を除くの外地方官の監督に屬す

第二條　私立學校を設立せんとする者は監督官廳の認可を受くへし

私立學校の開始及設立者の變更は監督官に開申すへし

第三條　私立學校に於ては校長若は學校を代表する校務を掌理する者を定め監督官の認可を受くへし

本令中校長に關する規定は之を學校を代表して校務を掌理する者に適用す

第四條　左の各號の一に該當する者は私立學校の校長又は教員たることを得ず

一　重罪を犯したる者、但國事犯にして復權したる者は此限にあ

らず

二　懲役に服すべき輕罪を犯したる者

三　破產者は家資分散の宣告を受け復權せざる者又は身代限りの處分を受け債務の辨償を終へざる者

四　懲戒に依り免職に處せられ一箇年を經過せず又は懲戒を免除せられざる者

五　教員免許狀剝奪の處分を受け二箇年を經過せざる者

六　性行不良と認むる者

第五條　私立學校の教員は高等學校の教員免許狀を有する者を除く外其學力及國語に通達することを證明し小學校、盲啞學校及小學校に類する各種學校の教員に在りては地方長官、其の他に於ては文部大臣の認可を受くべし、但專ら外國語專門學科又は特殊の技術を教する教員及專ら外國人を入學せしむる爲に設立したる學校の教員は國語に通達することを證明することを要せず

前項の認可は當該學校在職間有効のものとす

第六條　前條の證明を不充分と認めたるときは監督官廳は本人の希望に依り試驗を施すことあるべし

第七條　私立學校の校長又は教員にして不適當なりと認めたるとき監督官廳は其の與へたる認可を取消すことを得

第八條　私立學校に於て公立學校に代用する私立小學校を除く外學齡兒童にして其の就學の義務を終らざる者を入學せしむることを得ず、但小學校令第二十一條及第二十二條に依り市町村長の許可を受けたる兒童を入學せしむるは此限にあらず

第九條　私立學校の設備、事業其の他の事項にして教育上有害なりと認めたるとき監督官廳は之を變更することを得

第十條　左の場合に於ては監督官廳は私立學校の閉鎖を命ずることを得

一　法令の規定に違犯したるとき

二　安寧秩序を紊亂し又は風俗を壞亂するの恐あるとき

三　六箇月以上規定の授業を爲さゞるとき

四　第九條に依り監督官廳の爲せる命令に違犯したるとき

第十一條　監督官廳に於て學校の事業を爲さゞるものと認めたるときは其の旨を關係者に通告し本令の規定に依らしむべし

第十二條　第十條に依る處分に對しては訴願法に依て訴願することを得

第十三條　第十一條の通告を受け第二條第一項の手續を爲さゞる者及第二條第二項の規定に違犯したる者竝に第十條に依り閉鎖を命ぜられたる後尚私立學校の事業を繼續する者は五圓以上百圓以下の罰金に處す

第十四條　第三條又は第五條の認可を得ずして私立學校の校長又は教員たる者及第七條に依り認可を取消されたる後尚私立學校の校長又は教員たる者は三十圓以下の罰金に處す

第十五條　第八條に違犯したる者は二十圓以下の罰金に處す

第十六條　本令の規定は私立幼稚園に準用す

第十七條　文部大臣は本令施行の爲必要なる命令を發することを得

附則

第十八條　本令は明治三十二年八月四日より施行す

第十九條　既設の私立學校にして未設立の認可を受けざるものは本令施行の日より三箇月以内に於て本令の規定に依り其の認可を受くべし

第二十條　本令施行の際現に私立學校の校長又は教員たる者にして引續き當該學校の校長又は教員たらんと欲する者は高等學校の教員免許狀を有する教員を除く外本令施行の日より三箇月以内に其の旨を監督官廳に開申すべし此場合に於ては第三條及第五條の認可を受くるを要せず

尚文部省令、第三十八號にて、私立學校令施行規則を達せられたり。

●偉人の土產と藥劑　余、愛知縣北設樂郡に友あり。其の人かたりて曰く、余の父、東京より歸れど、やがで、先はらから、子弟より屋内のものを集へ、いへるは、いましらに土產をとらせんとて、某の伯は、かくと云へり。某の先生は、から云ひしと、其の地にて、諸大家に接し、其の話を記臆し、よきふしのみをあげて、是より上の土產はなしと云へりと。或とき癰を病みしが座敷の内に、多くの書に、繪の懸物もかけさせ、日ごとに、ことざまのをかけかへさせ、是をながむるのみにて、重き病は、醫師の手を煩はさず、遂に癒えたりと、また、頭痛、腕脚の勞れたる時にも、古本屋をたづね、さらでもいにしへの聖のいゝのこしゝ文どもみれど、たちどころに、おこたるとなむいへり。うらやましき土產なるかな。良き藥なるかな。おほかたの人は、都のかへりとし云へど、車に馬に、あや錦、こがねに珠の、色々をのみ、こよなきものと思はむ。かゝる言の葉を、土產など云ひたらんには、見むきもせぬ女などもやあらん。又、よには、學問して、病をかもすものあまたあり。是は、學ぶ己の爲に非ず、人の爲にする故なり。先づ、此の學校を卒へ、または、此の語を修め、何省に出で、または、何通辨せんなど思ひて、皆他の爲に學問する故、學べど、學ぶほど、苦痛となり、遂に二條となき、玉の緒を、ゆくりなくおし切るもあめる、かく重きやまひの藥となるものを、己が心得ざまにて、仲〱にえやみの種とするとは、心

すべき事ならずや。

●金を讓る　一農夫、駿州御殿場の路上に於て、小兒を伴ひ自轉車にて通行せる外人に會ふ、農馬、驚き、自轉車に觸れ鞍に挿したる鎌を折る、外人邦語に通ず、深く罪を謝し、鎌の代金を拂はんとす、農夫曰ふ、過ちは馬の驚きたるにあり。貴下の與る所にあらずと、互に金を讓りて決せず、遂に路上に置きたる儘、左右に別れしといふ事あり。今は、骨肉の財產しら、しきわらむには奪はんとする世に、農夫にして、かゝる事、いとけなげならずや。

●羽後の早婚　奥羽地方は、一体に早婚なり。なかにも羽後の國最も、甚し、秋田縣統計書に依り、前年中に於る、十六歲未滿、女子の結婚數を擧ぐれは、十三歲未滿四十二名、十四歲未滿、三百八十七名、十五歲未滿、六百八十七名、十六歲未滿、千百四十四名の多きにいたれりと云ふ。

●古墳發掘　島根縣内の尻細山、一に、十一山と云ふ。古昔、十一個の墳墓ありしと云ふ。此頃荒川某、之を開墾せしに、石棺を得たり、幅一尺五寸、深さ一尺五寸、長さ七尺、内に兩手を伸し、整然たる死屍あり、齒並等、一の缺けなし、又錆化したる直身の古劍あり、該山到る處、之を打てば、空洞の如き音を發すといふ。

●人造石炭の發明　倫敦デーリー、メールの伯林來電に據れば、獨逸巴丁なる、マンハイムに住める、モンターグてふ職工は、土、及び、或種の鑛物を混じて、人造石炭を製するの方法を發明し、其の道の專門家立會の上試驗したる結果、熱度極めて、強烈にして、二千二百五封度を燃燒したるに、其の殘灰は、僅に、九ペンニー、ウエイト（一ペンニー、ウエイトは、一オンスの二十分の一に當る）に過ぎざりし程の好成績を得たるを以て、直に、一會社を組織し、マンハイムの近郊に、一大製造場を設立する事となれりと。或る新聞に見ゑたり。

●巴里の博覧會　空前の施設なりと稱する、巴里の世界博覧會は、開設期、既に一年をこえず。本邦事務官長、林忠正氏は歸朝して、專ら、此の準備に周旋頻なりと聞く。

●鎌倉古器物展覧會　鎌倉の有志者は、自から處有する古器物古書畫類を蒐集し、鶴ヶ岡八幡宮の御神寶と共に去廿日より、向ふ三十日間、八幡宮に於て、展覧會開設の儀出願せり。

●品川子爵夫人の葬儀　品川子爵夫人の葬儀は、過る八日午前築地本願寺に於て執行せられたり。

當日午前七時より。富士見町なる、自邸に於ては、野村子、寺内總監、專ら、接待の任に當りて、親戚故舊の人々を迎へ、僧の讀經、親戚一同、靈前に參拜、燒香の後、同八時出棺、家從二名先導、北白川宮、山縣侯、在京薩國民協會、代議士、日本實業會、山林會等より、寄贈の生花造花、放鳥等、列を正し、島地默雷、福島深譽、日野數齊、眞柄慇信、長谷川楚雲等參仕、僧侶の次に柩、次に男爵、衷服加索にて、位牌を奉じ、柩側には、山縣伊三郎、平田東助、中村精男等、親戚の方に其の夫人令孃等隨從し、次に數百の會葬者、馬車人力車の轍を連れ、富士見町より、英國公使館前を櫻田門に出で、日比谷門より數寄屋河岸に、順路築地本願寺に着棺せり。同所には、皇族の御名代を始め奉り、大臣、樞密顧問官、外數百名の先着あり、同九時三十分頃より、導師、大谷光尊及び赤松連城、島地默雷等、各僧侶參列の上、嚴かなる勤行あり、右終りて、皇族殿下、御名代を始め、山縣、西郷、樺山、曾禰、清浦の、各大臣、及、各樞密顧問官親戚故舊の人々燒香し、同十時、全く、式を終り。間もなく柩車に移し、親戚故舊の人々、附添ひ、日暮里に赴きたり、當日、會葬の重なる人々は、各皇族殿下御名代を始め山縣、西郷、樺山、青木、田中、曾禰、清浦の各大臣、杉、河瀨、尾崎等、各顧問官、毛利五郎男、大村德敏子、吉川重吉男、平田東助、大浦警視總監、安廣内閣書記官長、古市、中村、小松原、奥田等の各次官、千家東京府知事、鮫島武之助、鈴木大亮、兒玉淳一郎等、各貴族院議員、佐口、大岡、元田、和田等、各衆議院議員、澁澤榮一、大倉喜八郎、高田愼藏、馬越恭平等、外數百名の諸氏にて、寄贈の生花造花は、北白川宮殿下御寄贈の外、殆んど百餘對の多きに及び、葬儀の質素にして會葬者の多きは近來稀に見る所なりき。

●矢田部博士死す　高等師範學校教授理學博士、矢田部良吉氏は、先つころ鎌倉に、避暑し居りしが、去八日、遊泳中、過て溺死したり。

●信濃の實行會　こたび、正五位諏訪忠元主より、實行會發會式によせられたる祝文を得たり。其の會の旨意は、詳にせずと云へども、此の文にて、大概は知

られたり。そは世の爲めいともよろこばしき事なれど、こゝに、其の文をかゝげつ。

實行會發會式に寄す

世の中の事、一得あれど、一失ありと、古人の言けんも、誠にさることなり、維新、この方、西の國との交わりしより、學びの道は更也。其の業務を營むにも、萬事ひらけに、開けて、便よき世とは成にける。されど、わが國と、彼の國々とは自變はれるふしあるに、一向に、彼の國ぶりになりはてんと思ふは、いとあやまれり。我國は、古より、上を敬ふこゝろ深く、又、眞心を盡すに富りしに、後、儒教渡りきて、我國民の質に適し、益々忠孝の心厚く、はた、義俠の性、深かりけるは、いともうでたく、たのもしきを、世の開くるに從ひ、そのこゝろ、やう〳〵、薄らぎて、今は、只、己が利欲をたくましうせんとして、其の身の名譽を顧ざるあり。又、其のかみ、淺からぬ惠を受けたりし人の、いま、世にさすらひさまよふを、見ても、露しらぬ顏に、打過しひとなどあるは、憎みてもあまりあり。今の世の、上流に位せる人々を見るに、世の人の模範たる身をもて、一時の情欲に引れ、不德不正の行をなし、遂には、家をも、身をも、失へるあり。實に、これ不忠、不孝の人なり。又、其の淸き、心をもちて、神に仕ふべきひと、或は、世の人を善道に導かんと敎へさとすべき僧侶にして、俗人に劣る行するあり。殊に敎員は、後來、御國の柱とも成るべき學生を敎ふるなれば、其の任、いと重きなり、今の敎員、其の素行治らぬ多し、かくては、學術、才能秀たりとて、御國の爲め有害の人なり。此等の人にて、猶かくの如し、他はいはでありなん。いかに下りたる世とはいへ、斯も風俗のみだれ、道德すたれたる時にかあらむ。遂には、御國を思ふ眞心も失ふべし。おそるべき事なりけり。近き頃、此に心付き、多く、愛國の人々、遠近にあらはれて、道德會と云ふを立てつゝ、澆薄の俗を矯めんとするは、悦ばしき事の限りなかりけり。されど、

多くは善行を語り、名言を説にとゞまり、實行せんと魁くるものなきは、わかずれもひけるに、此度、信濃國飯田の人、原ぬし、今の世の風俗みだれ、道徳すたれたるを歎きて、その同志の人々と計りて、實行會を立らる。是、徒に、金言卓説を話るにあらず、自進みて行ふなりとぞ。誠は、國の爲め、人の爲め、こよなき功とも云べし。今より後、其の同じ心の人々力を合せて、信濃國は更なり、全國にて、其の功力をあらはすべき時の至らんことぞ望まるゝ、いさゝか思ふ由を記して、祝詞にかへぬ。

●救民院　人情くだり。たゞ、名利に走る世の勢となりける折りしも、爰に兵庫市に救民院の現はるゝあり。其の旨とする所は、世の便なき孤兒を集めて、良教育を施しにありと、いとも目出たき事ならずや。其の機關として、名譽新報の發行あり。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題	…………………………
	…………………………
住所 姓名	

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題	……、……、……。……、……、……。……、……、……。
住所 姓名	

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。



教の庭

八月廿日兼題　羇中虫

天

なく虫の聲をかなしときゝつるは
旅なれぬまのこゝろなりけり
三河國園社員 豊橋町　加藤數子

地

やとるべき里はみえねと嬉しきは
人まつむしのこゑにぞ有ける
一丁目六番地 麹町區元園町　戸塚てつ子

人

草まくら虫のふしどにぬる夜半は
月にはうきをかこたざりけり
伊豫 松山市 出淵町　中村きよ子

秀逸（十首）

宿からんうまやはいまだ遠けれど
ふりとゞむなりすゞむしの聲
肥後　友永章子

都こいでてともなふ月もなき宿に
肥後　虎口資子

行きなやみ心もほそきうまや路に
いとゞふりそふすゞむしの聲
肥後　小森田輝子

くさまくら露けき旅のあはれさへ
おもひしらする虫のこゑかな
甲府　坂田きみ子

松虫の聲をしきけばいつはあれど
秋こそたびはかなしかりけれ
山口　村上操子

面しろくうたへる虫のこゑ〳〵は
うきをわするゝくさまくらかな
麻布　千石素子

はた織もうまおふ虫もとり〴〵に
秋のたびちそなぐさまれける
日本橋　諸井久良子

さらぬだにさびしきたびの手枕に
あはれをそふる虫のこゑかな
丹後　羽室象子

鈴鹿山ゆふこえくればあはれにも
聲ふりたてゝすゞむしのなく
四谷　牧瀬から子

おひやどりする人もなき旅まくら
こよひは虫をともとたのまん
芝　佐藤ひで子

（以下原稿到着順）

旅のそらものさびしきにむしのねは
たゆすきこゆてなぐさめにけり
服部倫子

草まくら夜ごとにかはるうきねにも
むしのねしげくあはれそへけり
石井豊子

たび衣かたのまよひをはこれ路や
つゞりさせてふきりぎりすなく
佐々小琴子

旅のそらあはれをそへてすゞむしの
佐々有朋子

ふりいてでなくこゑのさびしさ

さらぬたに悲しきものをたひまくら
むしのこゑきくよははつれなき
中山登美子

耳ちかくこほろぎさへも音をそへて
むすびもあへぬふるさとのゆめ
岸崎豊子

千々になく虫にねきけばたびびとの
おもひも千々にくだけこそすれ
溝口貞子

まくらかるやどは夜毎にかはれとも
むしのなく音はかはらさりけり
山田稻子

こほろぎの蹤のやどりはかはらしを
ねざめのともにいゑもやすめぬ
那須昌子

いづくともやどりもわかぬ夕くれに
ひとまづむしのこゑしきりなり
村崎包子

ゆきくれてうまや路いそぐ旅ひとを
なぐさめがほのすずむしのこゑ
黒田明子

かなしくも又なつかしくきこゆるは
ふるさとほきのへのむしの音
永井さい子

秋の野にやどるたびびとさびしさに
ともまつむしのこゑしたふかな
中村壽枝子

さらぬだに草のまくのさびしきに
あはれにすだくむしのこゑかな
福原基子

たひころも山ぢいそけさすゞむしの
ふりすてかたき聲にもあるかな
山本能子

たび衣かさぬる夜半のさむけさに
つゝれきせさやむしのなくらん
淵本宗壽子

さらぬたにくさの枕のつゆけきに
あはれをさふるむしのこゑ〲
竹村竹里子

草まくらたびねのとこのあばれさを
もしもさまさまれにやなくらん
德永萬壽子

旅ねしてつくづくしのぶふるさとの
わをまぞむしのねさへこひしく
德永廣子

草まくらたびのやどろらに夜もすから
いともさびしきむしのこゑごゑ
澤田耶子

旅まくらむしのこゑごゑさまさまに
なくねふけゆくあきのよのそら
澤田春子

うき旅にたれをよつむしねにたてて
わが手まくらのゆめさますらん
澤田十萬里子

たらちねの母まつむしのこゑとのみ
きけばたびねのうらまさりけり
澤田靜穗子

草まくらむすぶかのねのよもすから
まくらにたはぬむしのこゑごゑ
山根久子

つゆはおき風はみにしむたびのみに
あはれをそへてむしのなくなる
高やす子

つゆはくろ旅のころものしめり音に
あはれをこめてむしそなくなる
名取よし子

露けさもうへこそまされくさまくら
夜たゝなくなるむしのなみだに
名取正代子

よろづみなあはれ悦ゆるたひなるに
かなしさそへてむしそなくなる
田代綾子

たひころもきつゝなれにし我身にも
あはれはふかしすゝむしのこゑ
立田原富子

ふるさとのたよりもかなと思ふ夜に
あはれませさかまつむしのなく
立田原國子

旅ごろもつゆおきそふるさ夜なかに
なかきうらみのきり〲す鳴く
立田原直子

ふるさとをしのぶが瑞の夕まくれ
くさむらふかくむしのなくなり
小笠原寛子

たひねするやどの淺茅につゆみちて
小笠原元子

いつまでもなれぬたびねはうきものを
　ころもさせてふきり〳〵す鳴く
田村多豆子

いなたにも家はあれどもすゞむしの
　ひまつ虫のかへになくなり
古宇田幾久子

ふるさとを遠くはなれしたびまくら
　音にさそはれてやさりぬるかな
河口愛子

ふるさとの庭をゆめぢにたどるらん
　よなよなねらすむしのなくれに
椎野ぬき子

行きくれてやどあるかたの遠ければ
　たびねのやどにまつむしのこゑ
道廣やは子

たびごろも知らぬ野路にゆきくれて
　むしなくのへを一夜からまし
内海順子

遠津の郷かりねするたにわびしきた
　よすがらききぬむしのこゑ〳〵
立原民子

せきかはらやされる庭のくさむらに
　くつはむしさへなきすたくなり
立原浜子

旅ころもたもとのつゆをはらひつゝ
　むかしをしのふくつはむしかな
藤井澄子

くさまくら從のゝつゆのしげきよに
　いをねでむしのこゑをきくかな
藤井綾子

まらぬたに山路わけ行くたびころも
　あきかぜさむくこほろぎのなく
吉田久子

わがさとのれにもかはらてなく山を
　あはれをそふるむしのこゑ〳〵
竹村貞子

月はすめど氣はやすからぬ高まくら
　いく夜ききくらんくさのまくらに
山田靜子

行くれてみちふみまよふしばの上に
　さもれになけるむしのこゑ〳〵
山田婦美子

我が園のかきねにすだくむしの音の
　こゝろぼそくもむしの鳴くなり
稲島多喜子

朝ぼらけ聲ゑたへ〳〵にきこゆなり
　ふけゆくまゝにかすかなりけり
川上てつ子

草まくらねやらでものをおもふ夜は
　にはの千草にすだくむしの音
竹内つね子

なれてきく旅路のやどのすゞむしは
　あはれいやます虫のこゑ〳〵
吾妻ちか子

うまやぢやたつなはさらてくつは虫
　ふりすてかたきこゑになくかな
舘脇ます子

立出てゝきくそわびしききり〳〵す
　あへをおひゆくたびそなかしき
新海わか子

眞萩さくあき野のたびはふりすてゝ
　いく夜たびぢにゆめもむすはて
小曾根しう子

草まくらたびねのゆめのなごりにさ
　ゆきもやられぬすゞむしのこゑ
荻原章子

をひしろの旅のうりねさくさまくら
　うつゝにきゝぬむしのこゑ〳〵
大谷美子

いかなればつゆけき秋のうまや路に
　ねむればさますまつむしのこゑ
青木たま子

おもふかなつゝれさせてふ虫のねに
　ひきまつむしの夜たゝなくらむ
田中すゞ子

けふも又なれぬやま路にふみまよひ
　わがふるさとのあきの夜さむを
上野津愛花子

夜もすからなく虫の音にいさごしく
　なみだふりそふすゞむしのこゑ
田尻保代子

たび路をばいそきゆきけん草まくら
　たびのあはれをおもひしりぬる
靜枝つゆ子

わけ行けはつゆもいろある八千草に
　日かずつもれどなきたねもせぬ
木村きく子

こゑさま〴〵のむしそすたける

草まくらたひのやとりに日は暮れて
あはれをかたるむしのこゑ〴〵
香川頴子

まつむしのこゑをきくにも別れこし
ふるさとひとのおもほゆるかな
香川ちゑ子

秋の夜のこゝろひとつにたひねして
千くさにすたくむしのこゑかな
菅原松子

旅ごゝろもきつゝなれにし身ながらも
みやこわひしきむしのこゑ〴〵
香川いく子

草まくらゆふへ〳〵にきにくむしの
ねにつれてこそおもふふるさと
香川あき子

いへにしてきくたにもなほ悲しきを
たびねの夜中にすたくむしのね
安齋しけ子

古さとのあさぢのさまもしのはれて
かなしさそふるむしのこゑ〴〵
神田秀子

旅しあばかなしきものをまたさらに
ものおもはするあきの夜のむし
北原秀子

ふるさとにわれまつ虫のみゑきけは
たびぢはいとゝわひしかりけり
新泉さよ子

たひにして虫のねきけばふるさとの
さひしかりしもこひしかりけり
新泉翠子

月よりもなほすみわたるむしのねに
たびのつかれもわすれはてけり
新泉松子

まつ虫のこゑしげき夜はふるさとの
はゝもかくやといねもやられず
服部かつみ子

つゆしげき草ふみわくるたびごろも
むしのなくねにそでしぼりつゝ
隈本ふみ子

籠のうちの虫のねきゝつまくらとて
くさはむすはぬたひのなくさに
賀茂筵子

たひにしてくれ行くのらに小雨さへ
ふりいてゝなくすゝむしのこゑ
服部萬子

まつといふむしのねゆかし遠さかる
いへぢをおもふくさのまくらに
伊東千代子

たひなれはまつらむこらに松むしを
きかせまほしきおもひのみして
伊東いさ子

野べちかく竹のまくらをかるよはゝ
むしのねたかみねられざりけり
河合縫子

草まくらたびねのうさをなくさめて
こゑおもしろくすゝむしのなく
越智龜代子

戀しさのかぎりならましくさまくら
ねられぬ夜半のこほろきのこゑ
高市にし子

きゝなれし虫の音なれとくさまくら
なほひとしほのあはれそひけり
濱さみ子

さらぬたに淋しきたびのゆふまくれ
こゑあはれにもむしそなくなる
森こと子

草まくらたびのうさをはかこつ夜そ
あはれをそふるむしのこゑかな
野中朝子

小夜ふけて虫の音たかく身にしめは
かなしさまさるたびのそらかな
田中房子

きゝなれし虫のこゑさへあはれなり
なかきたびぢのゆふくれのそら
大谷津峰子

きり〳〵す鳴くなる聲もみにしみて
かなしかりけりながきたびぢは
尾崎嘉子

日ぐらしの虫のなくねにいさゝしく
かりのやどりもいそがるゝかな
池澤天與子

ふるさとを出ていく日をすごしけん
かりのやどりにむしのねをきく
川田八重子

中々にたびのなくさとなりはせて
吉崎世根子

あさ夕に籠かひなれにしきり〳〵す
あはれかづそふまつむしのこゑ　北島操子

虫の音にうき夢さめてくさまくら
たひにて聞けはかなしかりけり　北島松子

くさまくらあまりさひしき虫の音に
よろもすからにものおもふかな　鳥山いさを子

故さとのそらなかめやるゆふべには
われよもすからゆめもむすはす　北島功子

古さとのしのばるゝかなうまやぢに
わけて身にしむむしのこゑかな　相澤さた子

旅きぬのそてにつゝまんよしもかな
ふりいでゝなくすゞむしのこゑ　泉川うた子

さらぬたにつゆけきたひの草まくら
いへつとにせんむしのこゑ〳〵　隈本櫻子

さらぬだにいさゞせかるゝ旅ころも
むしのなく音にそてしほりつゝ　綿野りき子

いそぎゆく旅にしあれどなにさなく
はゝそのはらにまつむしのなく
こゝろひかるゝむしのこゑ〳〵　永井花子

九月十日兼題　舟遊

天

四谷區南伊賀町四十九番地　牧瀬から子

一とせ、西の都にすみける時、をりしも、夏の日のてりはたゝきて、暑さたへがたかりけれど、心あへる友どちと、大井川に舟をうかべぬ、山のたゝずまひ、川の流れもいとをかしう、櫻かへでの若葉は、すゞしげにしげりあひて、緑滴たらむ斗なるが、きよき流にうつりて、今一しほの色まさりたる等、見るからにいとすが〳〵し、かしこかれど承保の昔のしのばれてといふもあれど、青葉のかげのうるはしさよ、水の底にもたれか植ゑけんとたはむるゝもありて、いとれもしろしとなせの瀧は水すくなくて、白き糸をかけたらむやうなるが、青葉がくれに細く見ゆやう〳〵川上にさしのぼれば、こゝかしこそびえたる岩に、白浪の千々にくだけて、花とちり雪とみだるゝ様いといさぎよくすゞしともすゞし、

かくながら袖に包まむよしもがな
つらぬきとめぬ水のしら玉

なほあかねどもかくてのみやはとて、もとのきしにかへる、夏の遊びは舟にてこそ、

大井川ながるゝ水に夏の日の
暑さをさへもかき流してむ

地

廣島市稻荷町　香川穎子

此頃の暑さに、ふと思ひいでたるまゝを、

堪へ難き暑を拂はゞやとて、四人の友と共に、前なる川に舟を浮べぬ、川のたゝなかに出づれば、風おのづから吹きていと心地よきに、やう〳〵暮れ行く空のけしき、何とも言はん方なし、老ばし流れにさかのぼり

てゆくほどに、日はまたく暮れ果てぬ、もとより定めたるあてもなければ、これよりまた棹もさゝず、風のまに〳〵まかせつゝ、かつ涼みかつ語りてある程に、向ひの山の姿も定かに見ゆるものから、待ちにしものやと東の空を仰げど、少しかけたる月の、青葉のかたより花やかににほひいでたる、いひしらずめでたし、かくて月いよ〳〵清くすみのぼれど、吹く風もいよ〳〵涼しく、またなき夜の樣となりにければ、皆々立歸らん心も出でず、なほたづさへたりし糸竹の樂器とりて調べんとする折しも、いつこなるらん、ゆかしくなつかしき琴の音のきこえくるに、人々顏見合せつゝ、おなじくおのがとりしをおきて耳をすます、あはれ面白の夜の樣や、目には水と空との月をめで、耳に妙なる音をきかんこと、さながら此世の中のこととも覺えず、われを忘れて、ひたすらめでかまけつゝあるに、夏の夜のならひなれや、いつしか月も山の端近う傾きければ、あまりに夜やふけぬらんと、漸々我にかへり、あくよしもなきを惜みつゝ、やがて舟をもどしぬ。

人

芝區田村町十九番地寺村方　田中すゞ子

名にしおはゞいざやたつねてみやこ鳥、ありしむかしをさくらんと、思ふどち三人はかり、舟こくにたくみなる老僕一人と、友なる君のめのとゝを具して、夕つ方よりいとしのびやかに隅田河原に棹さしぬ、やさしげにまねく蘆のもてなしかほなるに、かの鳥居らば一入興もふかゝらんなど、打ちかたらひつゝ、あなたこなたとこぎめくる程、日はやう〳〵暮れそめて、友におくれしむら鳥の、三つ四つなきつれて塒にいそぐぞあはれなる、折しも十六夜の月の、木々のひまより洩れきつ、はなやかに水の面にきらめきて、しつかによするさゞ浪のまに〳〵くだるさま、いとえんなるにもよほされて、唱歌などうたひつゝ、打ち興ずるまに、いつしかへだてたりし、木々の梢を出て、空高う昇りたる月影の、くまなくわれ等か舟の中を照らせる、げにうれしといふもなか〳〵なりや、歌よむはかゝる時ぞとみに唱歌の聲もたえ、みな〳〵空のみ見まもりて物案じかほなるもおかし、はてはもちきたりしたにざへかきちらしなどなす折しも、たがすさびにやあらん、岸邊の方に聞ゆる笛のねの、いといとう妙なるに、思はず筆をおき、ふなばた近うゐさりいて、耳かたむけぬ、み空には月いよ〳〵清く、笛のねとともにすみ渡り、舟そこにはゆるやかによせくる浪の聲もをかしうしらべを合せぬ、あし間を分けてこす風の、うすき衣をふきかへす心地よさ、ゑもいはれず、げに心ゆく限りのけしきなりや、今は何となら、ちりの世をはなれゆくらんやうにおぼえて、やがては、この舟の月の世界に入るにやあらんとうたがはれぬ、

人

甲府市　名取正代子

頃しも水無月のなかばにて、あらかねの土もさくてふあつさの、わきてけふはしも、そよとの風の音だになくいとゞくるしさやる方なきに、たゞ〳〵ゆふべをのみまちつけて、ゆあみなどしをへ、やがてともし火かゞる頃より、親しき友どち誰かれそゝのかして、舟せうえうせむやとて出でゆき、やう〳〵近づけど、汀つさと吹ふきかへす川風の、さすがに身にしみて、汗つめたきまで、涼しうおぼえぬ、さる程に、かなたよりいざめし給へとて、家形船どゝのへてこぎよせつ、いとうれしくて、のり出せど、川風にぬれてもふくかとばかり、追風のいとゞ涼しきに、岸の柳の糸長く川水を掃ひて打なびきそが枝にむすべる露には、螢の飛びちかふ様さへ、川波にうつろひて、さながら黄金白がねの玉藻やしづむと思ふ斗りなりき、さる程にやがて十日あまりの月影、花やかにさしのぼりて、同じく浪間に影をうかべ、舟もろ共にこぎ行くらんさまのをかしさいはん方なし、まして月は秋とのみいひふるしたる人にも似ずあまりにもさやかに涼しげなりけれど、人々あかずとて思ひ〳〵に口ずさむ、そが中におのれも、

おもふどちすゝむ小舟にさす棹の
さしもわかれぬ夕月夜かな

など、のゝしりあへる程に、いつしか夜もふけわたりて、月はいよ〳〵すみまさるに、あかずはあれど、かたぶくまでも見はやさんには、なか〳〵にをしむ心も切なるべしとて、やがて家路をさしてこぎかへりぬ、

（以下原稿到着順）

稲原蓮子

暑中休暇を幸び故郷にかへり、久しくとはざりし狭山のうから家を訪ひぬ叔母君のよろこび一方ならず、何くれともてなし玉ひつ、日影かたぶくを待ちて湯あみなどすまし、晝間の暑さ拂ひにとて、程近き、崇神天皇の灌漑の便にとて掘らせ給ひし狭山池に行き、舟にさをさして、そこともなく漕ぎ出でけるに、四方の山林の緑はすゞしく蔭き面にうつりて折々青葉のはら〳〵とちりくるなど、すがすがしさことはいはれず、そよ〳〵とみぎはを吹きくる風に、たもと重くはらみてひるがへされ、思はず、叔あなやと　母君の膝におどろきすがるなど、いとをかし。あはれ、このあたりに住居して夏の日を送ればやなど思ふ程に、夕月の影おもしろうゆくてを照らして、よするさゝ波の音いよ〳〵涼しく衣手にしみ渡り、そゞろに身もさむけくなりぬる様思ふものから、又あすの夕と惜くも舟を岸に漕ぎつけ、いそぎやどりにかへりて、かたくなゝる筆もて、思ひの一部をかくは、記しぬ。

佐々木隣子

大ゐ川にへだてなき友どちうちそろい、車はしらせ、歌袋たづさへ、横笛小鼓とりもちていでたちぬ、三舟にはあらねど、一舟に棹さし、上津瀬は瀬はやし、下津瀬は瀬よわし、中津瀬に棹がかりしつれば、東方已にあけたりしとおもふに、月いづる光になもありける、やをら、おのがむき〳〵、とりもち来し二管一鼓を、風の心にまかせ發しぬれば、瀬織津姫波のあや衣ふりかなで、月人男霊のま袖かきあはせ、舞がごと唄ふかごとみはつるに、深更をもうちわすれ、女どちの心の掟をやぶりつるこ

こちして、うらはづかしけれどかくはものしぬ、

中村さゝ子

焼くが如かりし夏の日も、今少し前彼方の西山にほつし、あたりもやう〳〵くらうなりたれど、我庭にはそよとの風もなく、ゆあみなしよひて庭に出で、團扇にあつきをまぎらしつる折から、へだてなき友垣のふたりみたりつれだちて、せつに舟遊を促がさるゝ物から、大河筋に舟をうかべたりしに、涼しさひろのくるしき暑さを忘れんばかりなり、仰げば皎々たる月幾千萬の星、青絹をはりたらむが如き大空にかゞやき、螢火の岸柳にうつらふさま、春の花の景色にもおとらざるべし、折しも涼風のさつとふき、疊をしきたらむが如き水の面さゞれ波を起し、すみわたる月影のくだくるさま又一入なりければ、かなたこなたとめりめぐりしに、追々夜のふけゆき、きりの深くこみたれば、中々名殘りをしかりしも、やう〳〵かへりぢにつきぬ、あゝ舟遊も人の快樂中の一なるべし。

河原芳子

鐵も鎔けなんばかりなる暑のあつさを忘れんものと、兄君をそゝのかして、友垣二人ばかりと、小舟にうちのりて、五十鈴川の流れに浮びつゝ、さかうする間に、月は朝熊の山際をはなれて、清き水の面に影を宿し、そよ〳〵とふく風が漣を起しては、くしき金龍水上によこたはる、あゝ心地よやと、あるは流に溯り、あるは下りつ、つひに宇治橋の上手なる一際廣き處に舟をとゞめて、あたりの景色ながむれば、得も云はれずすゞしきに、夏としも思はれずて、おのづと心すがすがしうなりける程に、歌などよみ出んと、各も〳〵只打ち合すれど、ならずあたらこの景色をむなしく見過すことの口惜しけれど、詮なし、おのれをかしきものよみ出て、皆の笑の種となりたるは、

すゞしさや流れも清き五十鈴川、

かくて、夜もやう〳〵ふけぬれば、いざかへらんと、兄君の言葉、惜しきながめを後にして、もと來し方へとかへりぬ、

村上みさを子

うき世はなれてをかしく心やるはざは、船あそびに及ふものなかるべ

し、されど、女はなれぬわざなれば、ひたすらに厭ひなんことを思ひはづらひて、たゆたひつゝあれど、今は外國人もまゐ來、外國にもものする世なれば、わがどちもさてのみあるべきものかは、そはともあれ、かくもあれ、六月のあつさを與所に涼しき風を打のせて、島山遠くこぎはなれたる、秋の夜すがらくまもなくてる月を、浪の上にうかべて、あまが家居遠からぬ浦べにたゞよひたる、小舟のうちの樂しみには、高樓も、水にのぞめるやども、なにかあらむ、

田中睦

そらにはなびける雲もなく、梢にはそよげる風もなし、けふのあつさをいかにしていゝしのぐべき、きのふだにたへがたかりつるをと、あせがきなげくなりしも、友だちきあひにけり、同じ心にうち出て、いざや同じくは涼しかるべきなみまに遊びて、しばしあつさを忘れんといふにもよほされぬ、とある橋のあなたより、こぎ出づるがあり、かくてやゝこぎ行く程に、船はいつしかみぎはをはなれ、にはかによはなれたる心地して、白島三県の島々もすがくめのまへになりぬ、やゝこぎ行きて、白島のわたりに船をつなぎぬ、人々いでゝ岸におるゝもあり、あつけさに何かはさてふれにとゞまりゐてゝみはたせば、玖島の山は、昔ながらの青松生ひしげり、晴れたる空に高くあらはれ、船のほかけは遠近のすさきをこぎさりこぎくるありさまもいはれず、わたし船をみれば、ひまもなくのりこぼれて水にひたれるも、今や沈み入らんとあやふし、されどいさかゝるけに、むかひの岸につきぬるもをかし、たはれめなどのせたる船は、ありさゝけんとにはあらずやあるらん、さころせく、ものゝ音うちならして、こゑはやりかなるなど いさみだりがはし、かくてわりごなどうちひらきてくらひつゝ心をやるに、すべて〳〵あつさなごりなくなりはてぬ、さらば今少し岸をはなれて遊ばんなどいひて、かぢとりどもつなをときぬ、掉さすまゝに、島もいつしかとをざかり、今きし方をうちみるに、いと興あり、かくて日もやゝ西にかたむきぬ、此頃のをりもよかなれば、同しくは月の出しほをまちてこそなどいふほどに、早くもかゞやきいづるものは、あなあはれとうちむかへは、今まで

みねしよのけしきも、ながめうちかはりて、絵にも筆にもかきつくしがたきぞいみじきや、夜もやゝふけぬべし、さらばこぎもどしてん、家なるはらからなど踊り心つけるもあり、さらばといひてもどしぬ、なりしも順風ふききたれば、さをとるいたづきもなく、いとやすげにて、そやすぐる頃にもとの橋にぞつきにける、

笹間しなか子

夏の日も漸く山の端にしづみて、蟬のこゑも音せずなりぬる夕つ方、松間の月もすみ渡り、日の程の暑さも忘れつされば今宵の月を隅田川に賞せばやと、心あへる友がき打つれだちて、小舟一葉をやとひぬ、舟は軽くかは風をうけて黄金の浪をかぢにまかせつゝ進めば、堤の櫻にすゞ風わたりてそよく音きこゆ、舟はいやすゝみて、荒川近ういたりぬれば、下つせの賑しきにかはりて、ものしづかに、川原の叢に飛かふ螢火は、天の川の落つるにやとあやまたる、すみ渡るは人心にて、ひとり月のみかは、先つ頃別れにし我友は、横濱に行き給ひしとかれてしも聞きつるが今宵の明月を如何に眺め給ふらむ、磯うち洗ふしら浪の、つゞみに合するつま琴のたへなるしらべ、さこそ樂しからめ、など語らふ折しも、川べのあしまにおりしものあり、あやしみて見つれば、こは鷺てふものにてあり、すべて今宵の景色、雪花の眺めにもまさりてなんありける、

瀧澤ちやう子

頃は葉月の中にて、暑氣烈しく照りはたるめきたる日影に、萩などの枯れしぼむ程にて、梢にすだく蟬の聲の、いと喧しさに、一際暑さをまし、草の廬にては、中々に凌ぎにくうなん覺ゆる、妾一日學びの窓を同じうして、互に親しみ愛せる友と、手を携へて、さしも廣からぬ飛庭を、行きつもどりつそゞろあるきをなし居りしに、ふと思ひ當れる事こそありたれそは、外の事にはあらず、今宵は十五夜なれば、月もよからん、定めし東京灣のほとりは景色もよからん、いざもろともに、涼みがてら隅田川邊より小舟を浮べて、今宵の月を樂しく眺めんと云ふ事なり、友もうなづきて、さらばとて用意しつ、車を雇ひて隅田川まで來り、それより小舟を浮べて川を下り、漸くにして東京灣に出でぬ、思ひに違はず月は恰も鏡の如く、くまなくてりわたり、心さへ廣く清くなりたる心地せられげに仙人のすみかも斯くの如き處なるらんなど語り合ひつゝ、暫し眺め居りしに、やゝ夜もふけ行きて、水の面も平らかになり、あたりもしづまりし故、女どちのみにて斯く遲くまで遊ぶべきに非ずとて、別れを惜しみつゝ家に歸りぬ、げに舟遊び程、世に愉快なる遊びとあらじかし

稲島喜多子

此の頃のあつさの、いとも〳〵堪へがたきまゝ、學のともどち三人四人語らひて、夕刻よりつれだちて、墨田の川原に舟うかべあそばむものと、いつみ橋より舟やとうてうちのりぬ、水夫が棹さすまゝに、舟はふら〳〵とこぎいでぬ、風は波のまに〳〵そよ〳〵と肌へすゞしく、こゝちよきことといはんかたなし、ゆきかふ船も多く、やがて水夫が高く低くふし面白き唄の拍子にゆられ〳〵て眺めゆくに、岸邊に釣りする童子の、雜魚つりあげてよろこびいさむあり、こゝろ〳〵の棧橋に、小手かざしなどしてたはむるるさまもをかしくとほく見渡せば、蒼海渺々たる品川の海に、白帆の風を孕んで往來するさま、釣舟のをちこちにかゝれる影の、ゑもいはれぬ景氣、われ等はさながら一幅の畫圖中の人となりぬる心地して、かへるもうらわすれ、からうたなど口すさびつゝ打興じぬる折しも、一天にわかにかきくもり、風をとろし〳〵く吹きいでて、あな危し雨さへいたく降りそひて荒れいでぬ、やは舟を岸邊によせて、と、水夫をせきたてつゝ、やう〳〵にして岸邊に漕ぎつけつ、からうじて陸にあがり、とある茶店に憩ひつゝ、濡れたる衣などかはかし、車を驅らせて、おの〳〵家路にいそぎぬ、歸ればいつか雨風晴れ、中天に明皎皎として月照らしぬ、嗚呼人の世は實にたれやらむの、のたまひし「あすありと思ふこゝろのあだ櫻夜半にあらしの ふかぬものかは」と、いさゝゆうちの思ひでにかくはしるしぬ、

來栖登美子

今年七月二十日あまり二日の日、朝よりあつさたゞならず、とるものも手につかねば、ひとりあせかきなげきしが、あはれ今宵の望月を學ひ

凉しき方にものせばやと思ひ立ちては、かの草場にてまつ出ならねど、ひたすら日の入ることの待たれてなん、やがて夕日のかげらふ頃より、三人四人の友だちそゝのかしつゝ、心も空に浮き舟を水に浮べて、足羽川しばし流れを逆上るに、同じ心の人にやあらん、かなたこなたに掉さして、あまたこぎ行くめり、

我舟にては、月や遅しと待つ程に、東の空ほのめきて、月かげさやかにてり渡りぬ、いづれも、うれしさに日頃たしなめる唱歌など口ずさむに、波の間のあつさ、ふきぬぐふ川風のそよとばかりに音なへば、汀のあしの葉末より、玉と亂るゝ白露の、とびかふ螢と打交りていとをかし、かくて柳のおかげに舟を止め、あしの間をこぎ行きなどするに、今は夜やいたく更けぬらん、人々のふなばた打ちたゝきて、うたひかはしゝ聲々も、いつしか絶ねて、たゞ岸への叢にすだく虫のこゑのみ、手にとるやうなるに打驚きて、急ぎ流れをこぎ下りぬ、

大谷美子

夏の日の辛うじて夕暮になりぬれど、暑たへ難しと思ふ折から、友きあひにけり、いさや凉しき流に舟遊びせんと、いさなふまゝによろこびて、小舟裝ひつゝ、みたりよたりの友と、夕日かげろふ頃より足羽川にこぎいでぬ、げに此頃の暑さ誰も同じ事にや、他にも數多こぎ出づるかあり、かくてよもの草木は思ふまゝに生ひたちて緑り深く、その景色はなさく春の花に劣もまじなどかたらひつゝ、さかのぼるまに／＼はや舟はしらぬまにのそめる處につきぬ、

汀のすゝきの露の玉をかざし、水に螢のとびかふ樣うつりてをかしきな、望月にはあらねどいで心のちりもありあれ凉しき風さへふきわたりて、舟の中には夏なかりけり、あはれまたなき凉しさかな、いへゐしてあせかき流せる人達を、このこゝちよき處にいざなはましかばいかによろこび玉はむを、遇れつるくち惜しさよとかたらひつゝゆく程に、あやしき雲のいでて、雨のけしき催しければ、いそぎてかへり路につきぬ、

山村隆子

同じき窓に物學びせし友の、今はなちこちに別れたるを、懇話會とて、夏冬には他國にあるども、皆この地につどひ、あるは日頃の樣うらなく語り出で、あなは、たのしき遊びなどなす事あり、さるに今年の會には舟遊をせばやと、あるものゝいひ出でぬるを、各げにもとて、夕げより瀬田川のわたりへ物せんと定めぬ、されはそれより或はすし或はにしめなど、おのがしゝに、破籠をとゝのへて、石場といふ處につどひぬ、やがて舟人のもよほしあれば、打ちのり、舟のこぎゆくまゝに、西かげの西よりさすもいみじくありし、かくて粟津の原を見つゝ漕ぎゆくに、矢走のかへる眞帆片帆、風に吹かれておもしろく、げに夏のあつさも打ち忘らるゝばかりなり、もとより友垣のへだてなきものどもなれば、學びのまどにありし頃のことども打ち語り、はては聲の限り歌ひ揚ぐるに、ある人のこゑには、ふなやかたの塵もちり、空行く雲もたゞよひぬといひ出づるものあるに、人にさてはさてそよめき、しばしは聲もやまざりけり、かくて舟は瀬田の橋のわたりにつきぬ、いまだ日のくらからぬに、皆破籠を開くに、なにかしは大食とかくれがしは小食なりなど、かたみにいひわらふもいとをかし、なりしも、七日の月石山寺の方に出でぬと、一人のいふにつれて、かなたをながめやれば、大空にすめる樣げにしくものもなし、さては紫式部がかの地よりながめて、名におふ須磨明石の卷を物せしとかいひ傳ふるも、げにさる事ならんと思ひつるに、かれこれなりかしさいはん方なし、それにめでゝ歌をよむ人おほし、時ならぬ言葉の花もこゝに匂ひ出でぬ、かくある中に、夜もあまりふけてはさてなごりを石山の月にとゞめて家に歸りぬ、

川崎ゆき子

そらにたなびく雲もなく、稍に戰く風もなくて、昨日今日の暑さ如何に凌くよしもなく、身をおくべき處なし、たま／＼親しき友の來り、同じ暑さのことのはを語らふうちに、一日暑さを避けまほしさ、某しの日、我懸面の池に舟を浮べて遊ふ、柳の下の淸き風おもむろに四方に起り、柳の枝をゆする其凉しさ仙人の世界に入りたる心地ぞする、其時は、早

や日は西の山の端に入り、月は赤くつよく光りて、風淵丸く東の山より木の間のかくれにあらはる、涼風叉月と供に吹き來り、いづこかの琴の音も、それと合する笛の音もいとゆかし、妾も友なる人と歌を詠じかはす、其涼しさ其樂しさよ、

安齋しけ子

一日心あへるどちそゝのかして、某川にものしぬ右には山なびかへ、左には木立へたてゝ山家さへぞ見ゆる。山靑く、水清く絶えず衣の袖を吹き拂ふ松風は、水音に和して天の樂かとあやしまる、げに仙境とはこゝならんと、人每にいふめるもことわりや、かしがさましかりしせみの聲は、松の梢ごとにかゞやきたる夕日とゝもに消え行きて、東の山の端よりうら〱とさしのぼる月、いとゐんなるに、そよと吹く涼風に、梢の露も、汀のあしに宿る螢も、玉とみだるゝいとをかし、打見やればかなたの木かげに、ともし火の二ツ三ツきらめけるもあはれに、やう〱光そへたる月影の、波にくだけてやどりたるも、いはんかたなきに心なき舟人も、興に入りけん、ふなばたたゝきてうたひそめぬ、友どちと語りかはしつ、波のまに〱たゞよひゆく涼しさは、けに夏ともなほにすかし、

いつこより秋は流れて來りけん
夏としもなき水の面哉

など口ずさむもげに忘れがたき夜のさまや。

北原季子

月白ク風清ク、如此良夜何、文机はなれて弟と手をとりて、そゞろありき、始めぬ、おのが門べより流れくる少き谷川も、そをせましと敝ひかゝりたる木々の青葉も、一面に光やどしたるもをかしさても、おり立ちゆくほどに、柳の糸のいと長うたれつゞきなる其本の流こそ、彼谷川の流きて、灑ぎ入る某の川なりけれ、あなおもしろの此宵の月やと、天を仰げば、星いとまれに、下打見れば、又川そこにも月かげのひらめくあり、かたへを見れば、柳の枝の下に、一の捨小舟ぞありたる、やよ姉上召し給へやとて弟のさなさりて舟よせられたれば、如何しけれど打乘りつ、一とを二となさしいつるまゝ、見わたすがまにさゝふきくる風と共にさゞ波のたちきて、幾つとなく月かげの碎くるもあひなしとやいはまし、むかひはるかに打のぞめば、峰高くそびえたる方より、を鹿のはつれさへきこえたる、げにいひしらぬものになん、

彼の赤壁の遊びの、山高く月小さしとの、景色もかくやありけんと思ふ折から、弟の唱歌なんどうたひ始めき、おのれも人げなきをさちにこゑ合してぞ歌ひはじめたる、其こゑいとあはれに、山川にひゞきたるもいはん方なくてなん、

おのれかへりきて、弟とかたらはん、大かたの人、舟遊といへば、いとなまめかしう、かみかたちをつりたて、いと賑わしく遊ぶ人多かめれど、中々に此宵はらからとの遊びこそ、まことの景色見る舟遊なりけれと、

大谷津　みれ子

今日は、ひるの程より暑、いみじう強く、夕ぐれ近くなりぬれど、なほ去らず、如何にして凌がんと思ふ折しも、親しき友がきの、二人三人訪ひ來て、今より某河に舟遊びせばやといふ、いと嬉しくとみに仕度とゝのへ家を出て道すがら此所かしこを見つゝ行くに、いづくも同じあつさにやあらん、人皆の門邊に立出て、風なきをかこつ聲のみ聞ゆるもをかし、やゝたどりて、某河の岸邊に至りぬ、おのも〱とりあへずいそ小舟に打乘りて、河上遠く棹さしつゝ、あたりを見やれば、あなたの木の間より、ほの〱と淸らなる月の昇りて、遠白く河のほとりにてり渡る景色は、言ひもいはず妾思ひつらく、かゝる時敷島の道など心得たらんには腰折の一首も詠み出でんものを、いと口なしとも口惜しうてなんあはれ友がきとうれしみいさみて、猶ゆく程に、月はいよ〱照りまさり、風はます〱涼し、右左の岸を見渡せば、種々の樹木おのづから高く枝を垂れたる、又千引なす大岩のあやしくも躍りて、飛び出でんばかりなるなど、實に此世の外の心地せられて、いと心もすが〱し、かゝる折しも、あたりの景色はたと小暗うなりてけれは、如何せしと打驚き、大空をふり見れば、一むら雲の月を覆ひけるになむ、あな惜く

やさ叫ふ間もなく、そのあだし雲は忽に晴きさりて、又明らけき光りを放ち、さながら月の笑顔をゑみつゝ見おろしたらん如し、其様嬉しうも階うもありき、或は笑み或は叫りなどして、おくがるゝまに／＼、いつしか夜は更け渡りて、いたく肌寒うなりにければ、本意なう小舟を乗りすて、岸邊に上りて、家路に歸りたるは、牛満の頃にやありけん、臥戸に入りていざ眠らんとせしも、前の様のまのあたりに見えて、眠りもやらねば、燈火かきたて、拙き筆もてかくなんしるしつる、

　　樹陰夏月
樹のはのしげみをわけてうたゝねの
　まくらにやどるつきのすゞしさ　　長澤いゑ子

　　雨中瀧車
さみだれの雨くものうちのなる神は
　ゆけのしろたのはしるなりけり　　同ゆき子

　　閑中螢
なか／＼に人もとひこぬくさの庵は
　なりにしらふるこそさもなる　　同　人

　　夏　河
いつかたに秋をやさしていくばかり
　すゞしかるらんなつのかはつら　　同　人

　　深山泉
み山路のたに間の清みづすゞしさに
　なつとしもなきあきかぜぞふく　　内海順子

　　草花先萩
やがて來んあきのしるべか花すゝき
　つゆをかさしてなびきそめけり　　神田豊子

明治三十二年度女鑑歌文月並兼題

九月五日	歌	閑居月	八月廿五日〆切
	文	水害を見舞ふ文	
九月廿日	歌	海邊霧	九月十日〆切
	文	暴風	
十月五日	歌	擣衣所々	九月廿五日〆切
	文	菊の花につけて友におくる文	
十月廿日	歌	野逕菊	十月十日〆切
	文	紅葉見に出て、雨に逢ふ	
十一月五日	歌	行路時雨	十月廿五日〆切
	文	案山子	
十一月廿日	歌	仙人	十一月十日〆切
	文	新嘗祭に客を招く文	
十二月五日	歌	社頭落葉	十一月廿五日〆切
	文	勤儉	

文科大學教授兼陸軍教授從六位内藤耻叟先生序
文科大學教授從五位栗田寛先生著

天朝正學

全壹册

定價　金三拾五錢
郵税　四錢

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て嘗て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇內無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國よ至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戸の源義公夙に皇道の振はさるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體しこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明よし學ふ所を知らめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

●菊版美本 ●全一冊 ●定價金廿五錢 ●郵税四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれは雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもの躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尙にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にれきて摸範となさは益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

杉谷正隆編

修身百首

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社

日本赤十字社社長佐野伯爵題字
日本赤十字社幹事松平子爵著作

八支紀行　全一冊

本書は去廿九年十一月佐野社長松平幹事と共に山口支部及九州七支部を巡回せられし折の紀行にして全篇優美なる國文を以てものせられ子爵の和歌伯爵の詩賦等巧を盡されたりことに地理歴史等に關する事などを擧げて漏らさず且支部當時の景況目のあたり見るが如く記されたり曾て日本赤十字第五拾七號の附錄として掲載したりしが大方諸君の需に依りて今回別冊と爲して世に頒つことゝなしぬ

實費郵税共　金七錢

日本赤十字社幹事松平子爵作歌
小山作之助氏校閲
橋本孝太郎氏作曲

日本赤十字唱歌　全一冊

正價郵税共　金三錢

本書は赤十字の要旨、日本の赤十字、赤十字の起源、ミスナイチンゲール、日清の役、等の數節より成りて赤十字事業を詠せる流暢優美なる唱歌なり此の赤曾て日本赤十字第四十二號の附錄として掲載せしものなるが今回訂正せられたる所あるを以て別に一冊子と爲して世に頒つことゝなしぬ家庭又は學校の用書として最適切のものなり

東京京橋區築地二丁目二十一番地
日本赤十字發行所

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替 銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無過送料		

明治三十二年八月廿二日印刷
明治三十二年八月廿三日發行

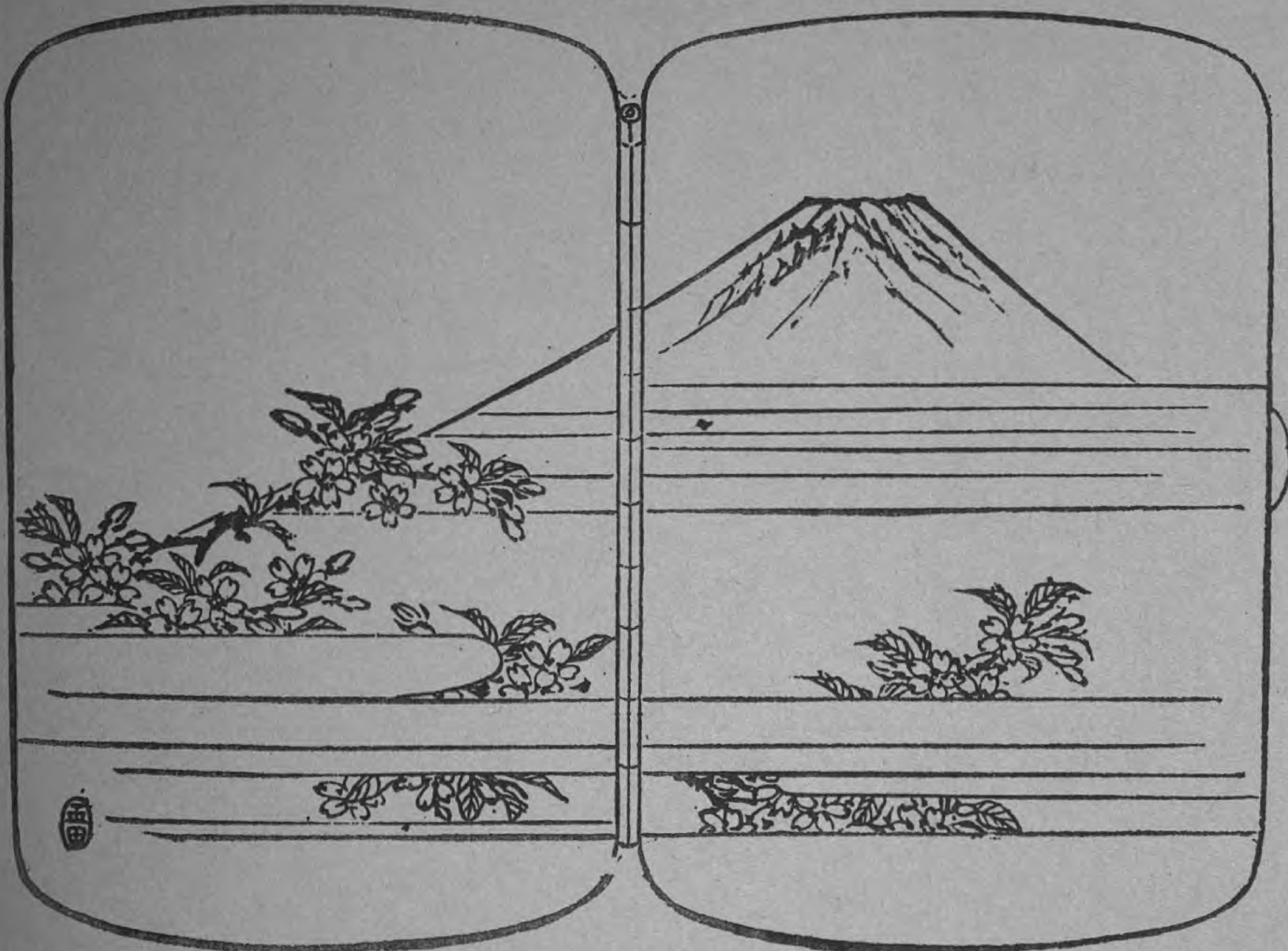
編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　(電話番號新橋八八)　國光社

〔明治二十四年八月四日内務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可〕

銀製輕便 巻煙草兼名刺入新形 發賣廣告



紙巻莨匣（シガレットケース）の重くて大なるは和服にも洋服にも携帯に不便なり去りさて粗末なる品を所持しては其人品を劣す
本堂數年の工夫を凝して斯く輕便に銀製する事を得たるに由り是を發賣す暑中輕裝の衣服には最も便利を極む名刺入をも兼たれば更に調寳なり
試に購求して其輕便を知り玉へ

●銀製無地價金七圓五拾錢
●仝彫刻付價金九圓
●鵬銀製無地價金八圓
●仝彫刻付價金拾圓五拾錢
●純銀製無地金八圓五拾錢
●仝彫刻付價金十圓五拾錢
●仝金象嵌價金十五圓

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

時計及寳玉類
貴金屬美術品商

天賞堂

電話番號新橋三百三十三

出張所々在地
東京神田小川町、横濱、名古屋
大坂、廣島、熊本、長崎、小樽

（印刷所　東京 國光社印刷部）